

愛知県 鳥類 生息調査

1967-2016

50年の記録



発刊にあたって

愛知県では、昭和42年（1967年）から県内における野生鳥類の生息状況の実態を把握し、鳥類保護行政の基礎資料を得るため、日本野鳥の会愛知県支部と協力して、鳥類生息調査を実施してまいりましたが、この度、調査開始から50周年を迎えるため、これを記念して「愛知県鳥類生息調査（1967-2016）-50年の記録-」を発刊することといたしました。



調査開始当時は、調査地が6地点でしたが、その後、平成4年（1992年）までに調査地を22地点に充実させ、各地点で毎月調査を行い、確認された野鳥の種類・羽数、季節変化、分布を長期間にわたって把握してきました。

この記録誌は、半世紀にわたり積み重ねてきた膨大かつ貴重なデータを整理・分析して作成したものです。都市近郊、里山、水辺及び山林といった環境の各調査地点において、特徴的な野鳥を選定し、それぞれの経年的な変化を視覚的に分かりやすく図示しております。また、野鳥は環境変化の影響を受けやすいため、その増減は自然環境の変化を私たちに伝えるメッセージ（指標）であると捉え、できる限り地域の自然環境の変化についても考察をいたしました。

この記録誌が、多くの方々に、この地域の野鳥のこと、そして野鳥を取り巻く自然環境のこと、人と自然の関わりについて、知っていただく一助になれば幸いです。

さらに、本県では、平成25年（2013年）3月に「あいち生物多様性戦略2020」を策定し、「人と自然が共生するあいち」の実現に向けて、多様な主体の連携による生物多様性の保全活動を推進しています。この取組を進める上で、私たちの身近な存在で生物多様性の大切な要素である野鳥の生息状況を把握し、その保全に目を向けていくことは大変に重要でありますので、こうした面でも御活用をいただければと存じます。

最後になりますが、こうした貴重な記録誌ができましたのは、日本野鳥の会愛知県支部の御理解、御協力と、本調査に携わっていただいた歴代の調査員の方々、執筆者の方々の御尽力の賜物であり、深く感謝申し上げる次第です。

平成30年3月

愛知県環境部長 菅沼 綾子

目次

鳥類生息調査 50 年に当たって	1
調査地 MAP	2
愛知県鳥類生息調査について	3
調査地共通の解析 (スズメ)	6
調査地共通の解析 (ハシボソガラス、ハシブトガラス)	16
各調査地ごとの解析	
1 平和公園	26
2 平針	30
3 大山	34
4 扇子山	38
5 東大演習林	42
6 岩屋堂	46
7 鶉の山	50
8 鍋田	54
9 矢作川河口	58
10 木曾川葛木	64
11 木曾川玉ノ井	68
12 佐布里池	72
13 汐川河口	76
14 庄内川河口	80
15 茶臼山	84
16 闇苅	88
17 段戸裏谷	92
18 鍛冶屋敷	96
19 香嵐溪	100
20 粟代	104
21 県民の森	108
22 古山	112
愛知県内と段戸裏谷におけるソウシチョウの現状	118
愛知県におけるウグイスの繁殖分布拡大	122
愛知県におけるキビタキの繁殖分布拡大	130
あとがき	134
付録 愛知県鳥類目録 (2018 年 2 月現在)	135



鳥類生息調査 50 年に当たって

小笠原 昭夫

カワウが群棲する知多半島の“鶉の山”へ私が通い始めたのは、1960 年の春でした。前年の伊勢湾台風による営巣木の被害は甚大でしたが、明治以前から受け継がれてきた肥料としての糞の需用が激減し、村人による保護が手薄になったことも深刻でした。カワウを護りたい…。その一念から、私は足繁く通って、繁殖調査に取り組みました。

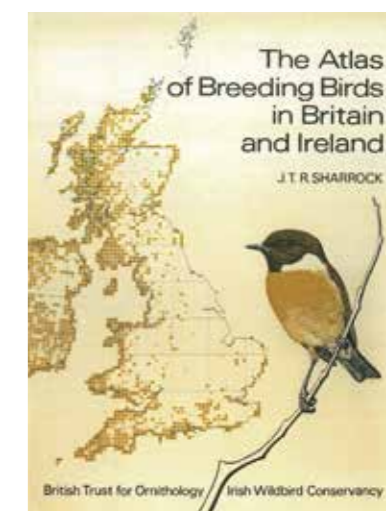
1962 年に南知多道路の建設計画が発表され、その道路がカワウの繁殖地の直近を通ることから、繁殖地衰亡の危機は一層高まり、私を自然保護の先進国アメリカの幾つかの野生生物保護区を訪ねて、保全の方策を学ぶことへと駆り立てました。

1967 年秋から愛知県の鳥類生息調査が始まり、私は鶉の山の担当になりました。県内に多数の調査地を設け、決められた調査員が毎月 1 回、種ごとの個体数を数えるという調査です。「生態学の基礎」という本の中で、著者オーダムは「何がいたかではなく、何が何個体いたか、を数えるところから生態学は始まる」と述べていますが、それに添う調査でした。これを積み重ねていくと、いろいろなことが解ってきます。一年分の調査結果からは鳥たちのおよその生息状況が、並行して行われた他地域の結果と合わせると、広域での季節ごとの分布状況が、更に何年も続けることにより、分布の変化や個体数の変動などが解ります。

当時入手したイギリスの資料 (写真) には目を眩りました。国内全域を 10km 四方の区画に分け (総区画数 3,862)、1968 ~ 72 年に各区画内に生息した全鳥種の繁殖状況を、丸の大きさで大 (繁殖確実)、中 (繁殖の可能性大)、小 (繁殖期・繁殖可能な環境に生息) の 3 段階に分けて図示しているのです。アオサギなどは 1928 年からの全国での営巣数がグラフで示され、さすが博物学の伝統ある国ならではの…と感服しました。

愛知県の鳥類調査が始まって半世紀、調査地の一部変更はありましたが、これまでの調査結果を見せていただいたところ、多くの種の動態や、2 種のカラスの (おそらく) 生ごみ漁りに関連した分布変化等、興味深い内容が読み取れました。

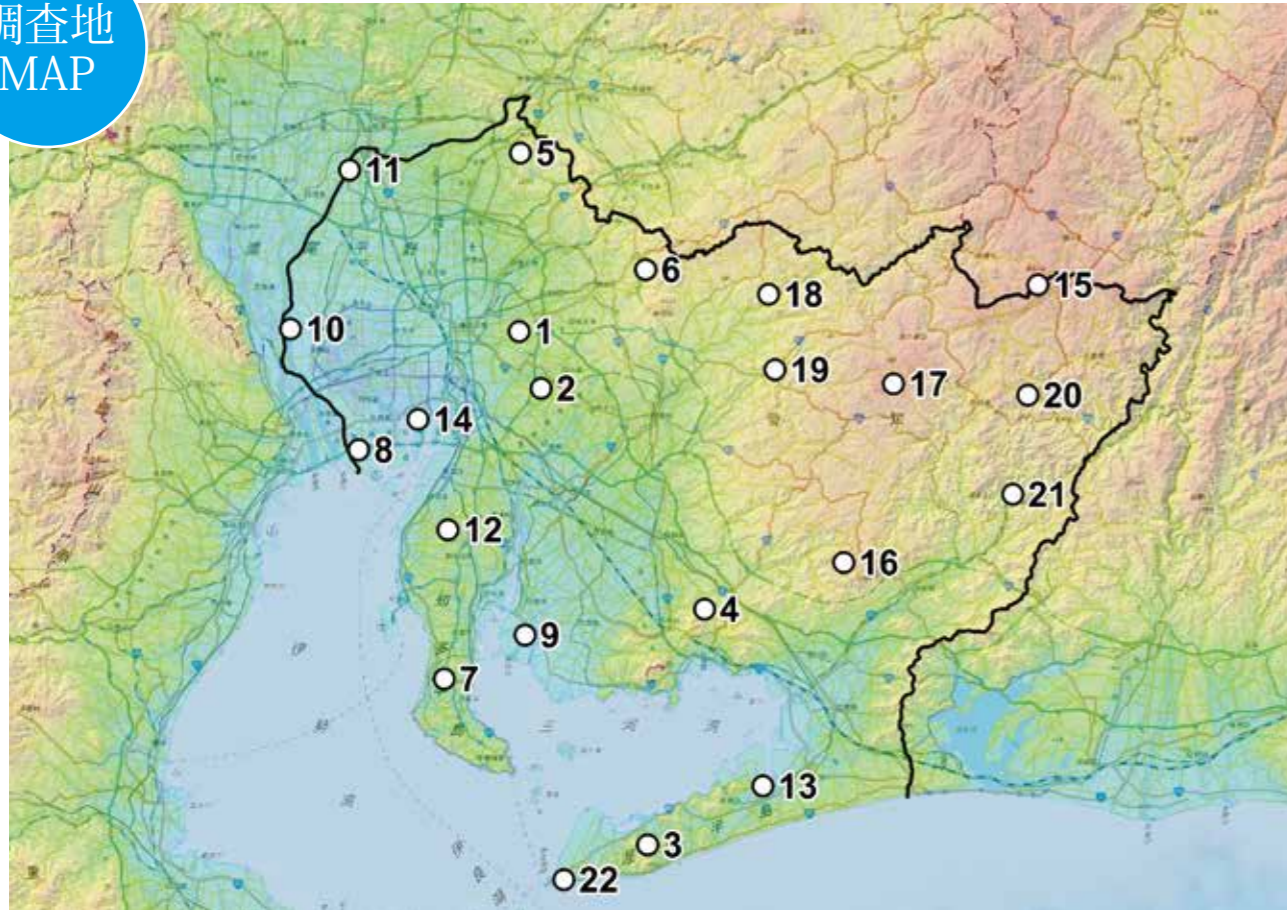
この調査を、できれば繁殖項目も加えて、続けて欲しいと思います。更には全国で統一された調査が定期的に行われることを期待します。自然環境の保全に役立つ貴重な資料が蓄積されることを、心から願っています。



J.T.R. シャロックス：イギリス諸島における鳥類の繁殖地図帳 (1977, T. & A.D. Poyser Ltd) の表紙カバー。この表紙絵はノビタキ (日本産と同種) のイギリスでの繁殖分布を例示。本文には詳しい説明が付されている。



調査地
MAP



- | | |
|------------------------------|------------------|
| ① 平和公園 (名古屋市千種区) | ⑫ 佐布里池 (知多市) |
| ② 平針 (名古屋市天白区) | ⑬ 汐川河口 (豊橋市、田原市) |
| ③ 大山 (田原市) | ⑭ 庄内川河口 (名古屋市港区) |
| ④ 扇子山 (岡崎市) | ⑮ 茶臼山 (北設楽郡豊根村) |
| ⑤ 東大演習林 ^(※) (犬山市) | ⑯ 闇苅 (岡崎市) |
| ⑥ 岩屋堂 (瀬戸市) | ⑰ 段戸裏谷 (北設楽郡設楽町) |
| ⑦ 鶉の山 (知多郡美浜町) | ⑱ 鍛冶屋敷 (豊田市) |
| ⑧ 鍋田 (弥富市) | ⑲ 香嵐溪 (豊田市) |
| ⑨ 矢作川河口 (碧南市、西尾市) | ⑳ 粟代 (北設楽郡東栄町) |
| ⑩ 木曾川葛木 (愛西市) | ㉑ 県民の森 (新城市) |
| ⑪ 木曾川玉ノ井 (一宮市) | ㉒ 古山 (田原市) |

※東京大学愛知演習林は2011年6月より「生態水文学研究所」に名称変更されました。

1 調査期間

(1) 調査の始まり

愛知県鳥類生息調査は、1967年度に林野庁が自然保全の基礎調査の一つとして、各都道府県に数カ所の調査地点を指定し、財団法人日本鳥類保護連盟に委託して鳥類生息調査を開始したことがきっかけとなっている。この時、愛知県では6地点が指定された。当時、愛知県としても基礎的な資料を得るために鳥類の生息状況を把握する必要があるとして、1968年度には林野庁が指定した調査地点に2地点追加した8地点で県独自の調査を開始した。この調査は愛知県が日本野鳥の会愛知県支部(調査開始時は名古屋支部)へ委託した。

(2) 調査地の移り変わり

1967年度から開始されたこの調査は、当初は6地点からスタートしているが、このうち、平和公園(名古屋市千種区)、大山(田原市:当時の調査地は小塩津)、鶉の山(知多郡美浜町)、県民の森(新城市)については、現在まで継続して調査が行われている。その後、1968年度に平針(名古屋市天白区)、1970年度に鍋田(弥富市)、1972年度に東大演習林(犬山市)、矢作川河口(碧南市、西尾市)、木曾川玉ノ井(一宮市)、段戸裏谷(北設楽郡設楽町)を調査地点として追加した。1974年度には佐布里池(知多市)、汐川河口(豊橋市、田原市)、香嵐溪(豊田市)を、1975年度には岩屋堂(瀬戸市)を追加した。

さらに、1983年度には、県内全域の鳥類生息状況を効率的に把握するため、調査地点の再配置を行った。この際、国土地理院発行の5万分の1地図を22メッシュ(15km四方)に区切り、1メッシュ内に1調査地点を原則として、調査地の配置を変更し、20カ所の調査地点を設定した。その結果、熊張(長久手市)、明見(岡崎市)、乳岩川(新城市)、三好池(みよし市)、猿投山(瀬戸市、豊田市)、新城保全林(新城市)の調査を終了し、扇子山(岡崎市)、木曾川葛木(愛西市)、茶臼山(北設楽郡豊根村)、闇苅(岡崎市)、鍛冶屋敷(豊田市)、粟代(北設楽郡東栄町)を追加するかたちとなった。

1992年度には、藤前干潟の状況を把握するために庄内川河口(名古屋市港区)を、サシバの渡り地点として重要な古山(田原市)をそれぞれ追加し、合計22地点となった。これら22地点については、現在も継続して調査を行っている。

1967年度から調査を継続している地点では50年、一番最近調査地点となった庄内川河口と古山でも25年継続して調査されていることになり、その間に変化した自然環境について、鳥類の種類や確認数の変化で知ることができる貴重な記録となっている。

なお、調査地ごとの詳細については、各調査員からの報告をご覧ください。

2 調査方法

調査は毎月1回行う。

水辺を除く調査地の調査は、ラインセンサス法を基本とした。調査地内に延長3kmの調査定線を設け、この調査定線上を時速1.5km程度の速さで歩き、調査定線の左右それぞれ25m以内に見聞する鳥類のすべてを記録した。なお、調査定線については、基本は3kmであるが、調査地によっては3km以上の定線を調査している。

水辺の調査地では、延長1km、幅500mの区域内に見聞する鳥類のすべてを記録した。

また、調査定線上に定点を設定することで、より多くの種類の鳥類が確認できるような工夫をしている調査地もある。

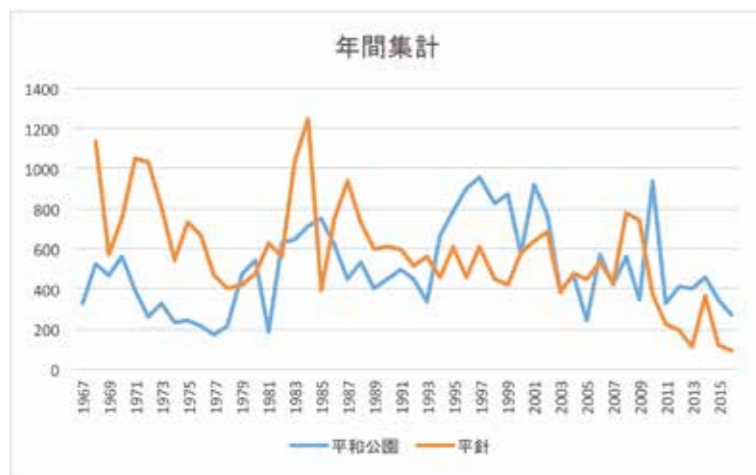
昨今「スズメが減っている」とよく言われる。50年の結果を地勢的に似ている調査地を比較しながら考察してみた。

1. 都市近郊：平和公園、平針

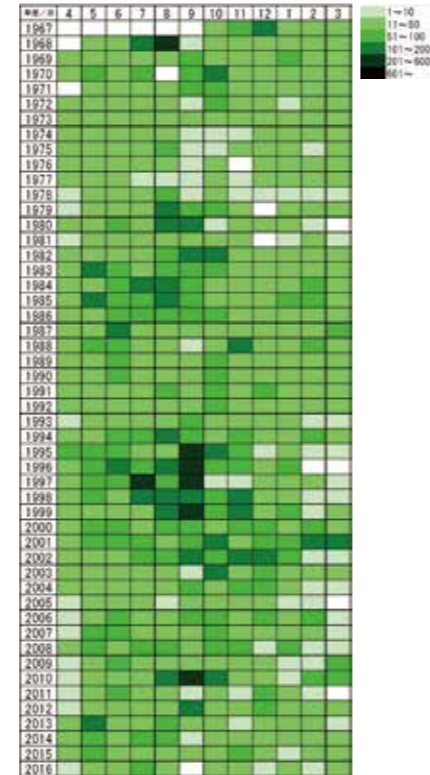
平和公園、平針周辺は住宅地に囲まれた緑地である。平和公園は公園緑地として保全されているため緑地面積が大きく減少することはなかったが、平針は開発により大きく減っている。

平和公園は調査当初から一年を通してよく見られているが1979年から1985年頃をピークとするまで増え続け、その後1994年までは多少の増減を繰り返しながら減少している。1995年から1999年をピークとするまで増加し、その後は増減を繰り返しながら減少傾向にある。直近2016年は57羽が最大となっているが、調査当初から大きく減少しているわけではない。一年を通してみれば9月が最大になる傾向がある。

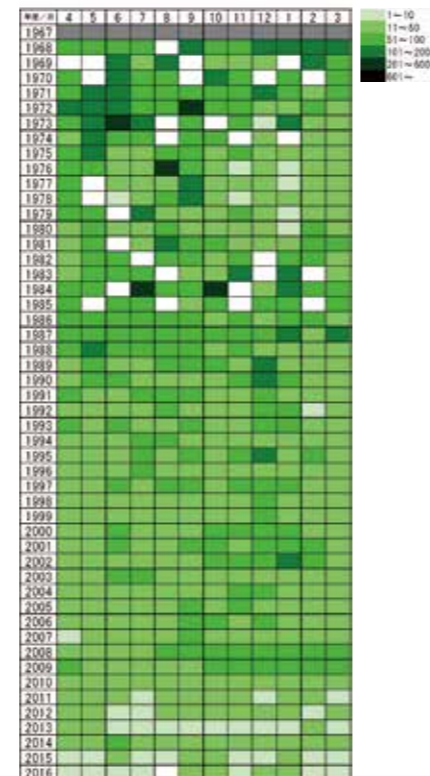
平針は調査開始より一年を通して多く見られており、1972、1973、1976年には最大200羽を超える数を観察する月もあった。その後は徐々に数を減らし、1984年頃に一時的に増えるが、2009年までは概ね年間600羽前後で推移している。しかし、その後急激に数を減らし、直近2年では最大でも20羽しか確認されていない。調査当時の里山的な環境がなくなり宅地開発による新興住宅がせまり、スズメの営巣とその後の生息する環境ともなくなりつつあるためと考えられる。



1. 平和公園



2. 平針



2. 里山：扇子山、岩屋堂、東大演習林

扇子山は1983年の調査以来、数は多くはないが観察されている。1996年、2002年、2003年では通年見られ、やや数が増えているが、直近の10年では主に春夏の繁殖期には見られるが冬季は見られない傾向が続いている。

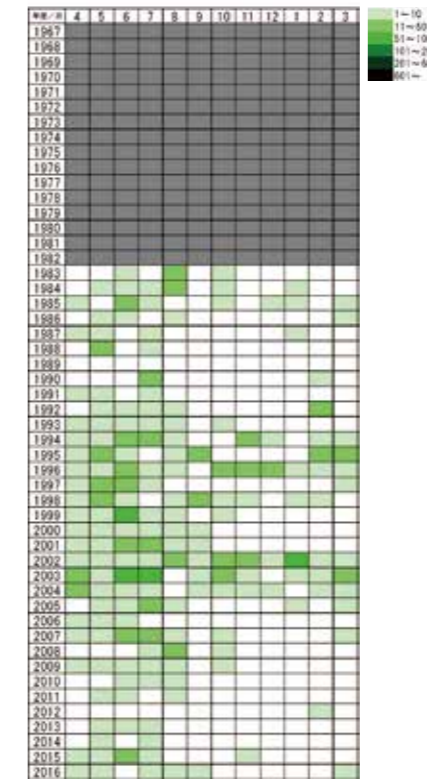
岩屋堂は扇子山と傾向が似ていて数は少ないが、1983年前後をピークにその後は見られることの方が少なくなり、直近10年はほとんど見られなくなってしまった。

東大演習林は地勢として里山に分類されるが、先の扇子山、岩屋堂とは状況が異なる。

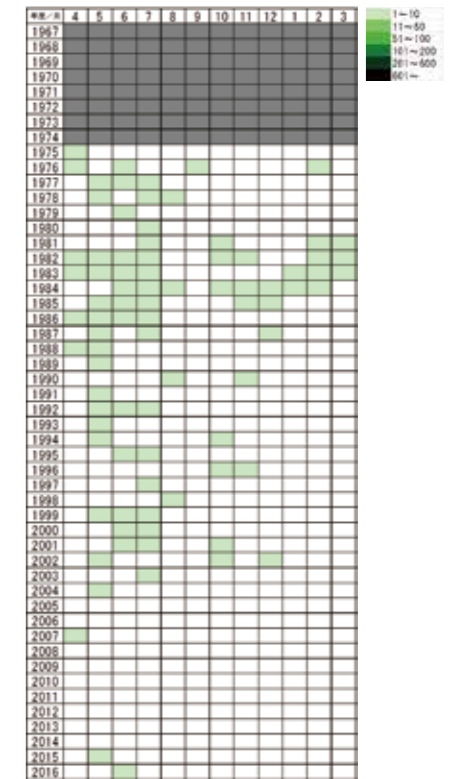
1972年の調査以来数は増加し、1996年～2003年に200羽を超えることが多くなり一つのピークとなっている。その後減少傾向になるが概ね調査当初と同じぐらいつり、大きく減少しているわけではない。



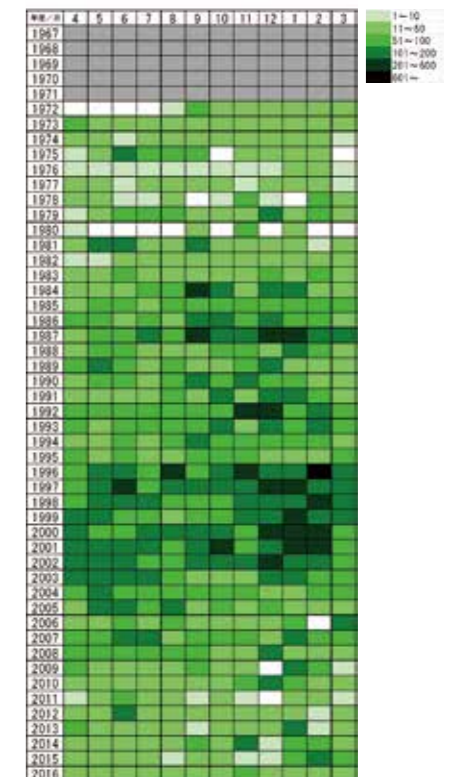
4. 扇子山



6. 岩屋堂



5. 東大演習林



3. 水辺1：鶺の山、佐布里池

鶺の山は美浜町、佐布里池は知多市にあるため池であり、どちらも知多半島にあり比較的増減の傾向も似ている。

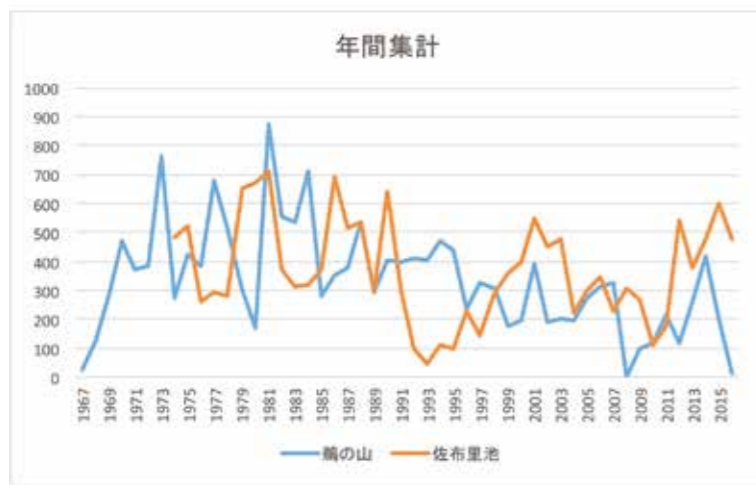
鶺の山は調査当初から一年を通して20～40羽前後が確認されていて、1981年から1984年頃が最大となるピークを形成するが、その後、徐々に数を減らしつつあり、直近の2016年には年間11羽しか確認されていない。これが一時的なものか分からない。

また、2008年には1羽も観察されておらず、2009年から2012年の秋冬にも観察されていないが、何か特有の事象があったかもしれない。年間では9月が最大となる傾向があり2000年頃までは、その傾向がよく出ている。

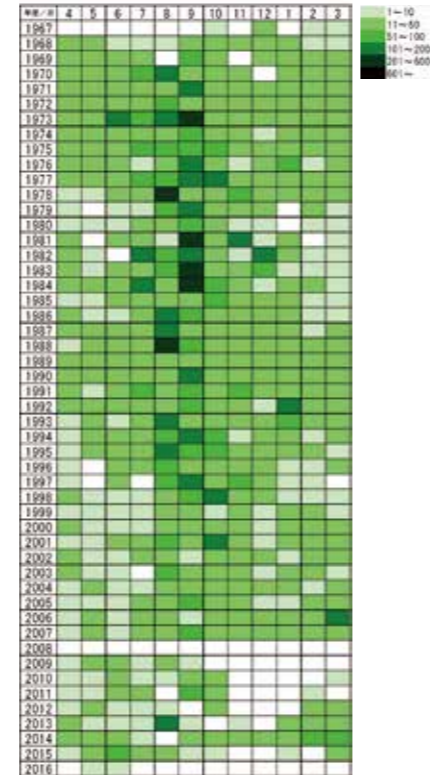
佐布里池は調査当初より多く見られている。1991年までは大きく増減を繰り返しながら年間平均500羽程度を保っていたが、1993年を最小に急激に数を減らしている。その後、2002、2003年まで増え、また2009年まで減少し近年まで増加傾向にある。

このように大きな増減を繰り返してはいるが、調査当初より数は減っていない。

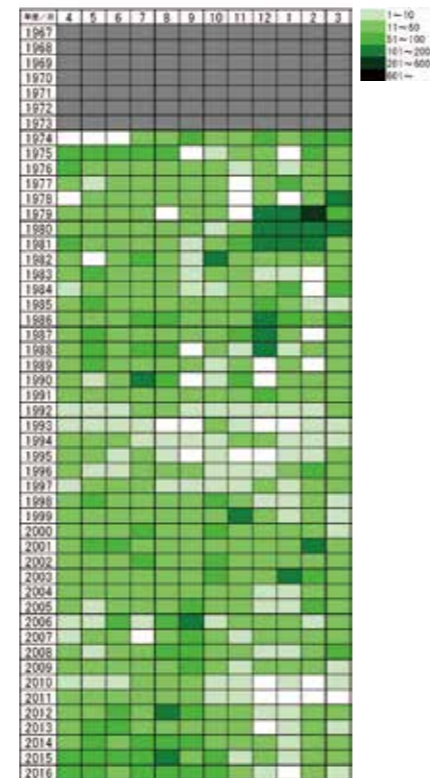
年間の推移では、当初は冬季に増える傾向であったが、近年は春夏に増える傾向である。



7. 鶺の山



12. 佐布里池



4. 水辺2：鍋田、汐川河口

鍋田と汐川河口はスズメの増減を見るうえでは鍋田と汐川の後背地とも田畑を中心とする耕作地であり、傾向も似ている。

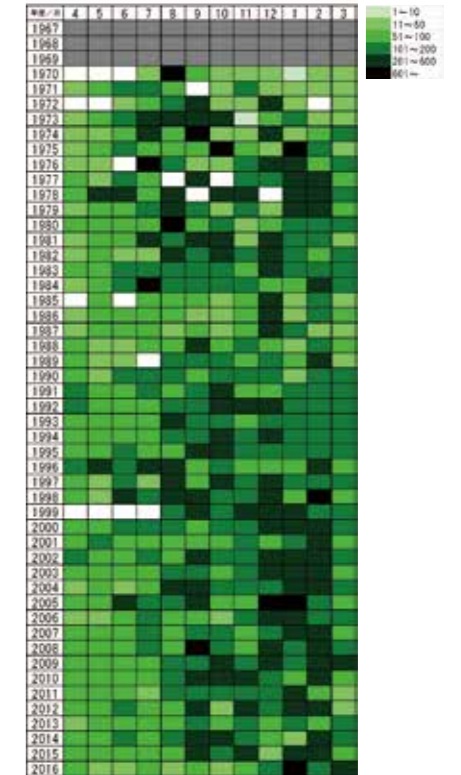
鍋田は一年の傾向としては、12月、1月をピークとする傾向にある。最大は1976年7月に3076羽を記録し、その後は年間の集計で2000羽前後を推移し現在に至っており、当初より減少しているわけではない。また、近年伊勢湾岸自動車道の擁壁の水抜き穴で繁殖しているのをよく見かける。

汐川河口では、干潟だけでなく後背地も調査対象となっており、範囲も広いので野鳥の数も多い。特にスズメの数は他の調査地と比較して桁違いに多い。

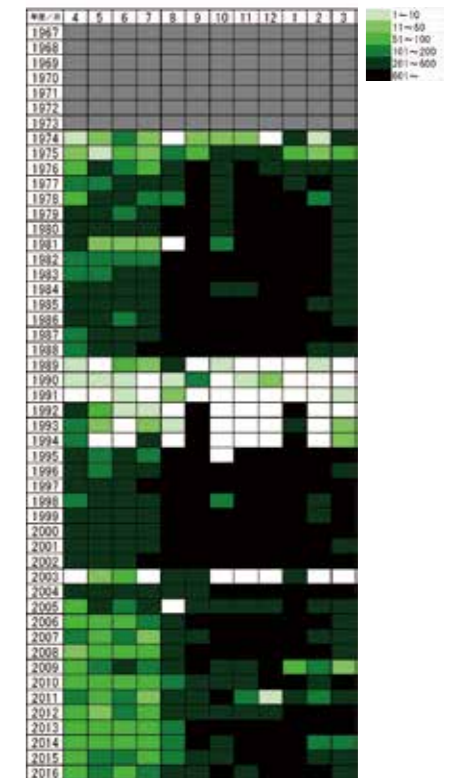
傾向としては調査当初より1987年までは増加傾向にあり、1989年から1994年には急激に数を減らし、翌年の1995年から2002年にはまた最大年間2万羽弱となるまで増え、2005年以降は6000羽前後で推移し、現在に至っている。



8. 鍋田



13. 汐川河口



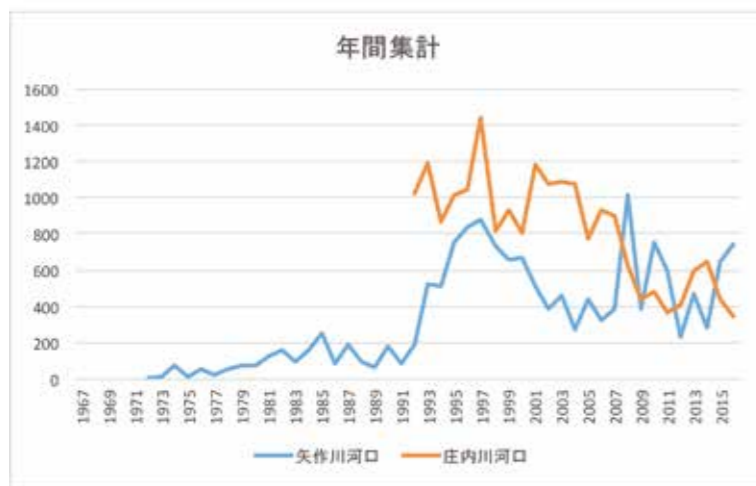
5. 水辺3：矢作川河口、庄内川河口

矢作川は碧南市と西尾市を跨ぎ三河湾に注ぐ河川で、この河口より約6kmまでを調査している。庄内川は名古屋市を流れ名古屋港に注ぐ河川で、河口は藤前干潟となっている。

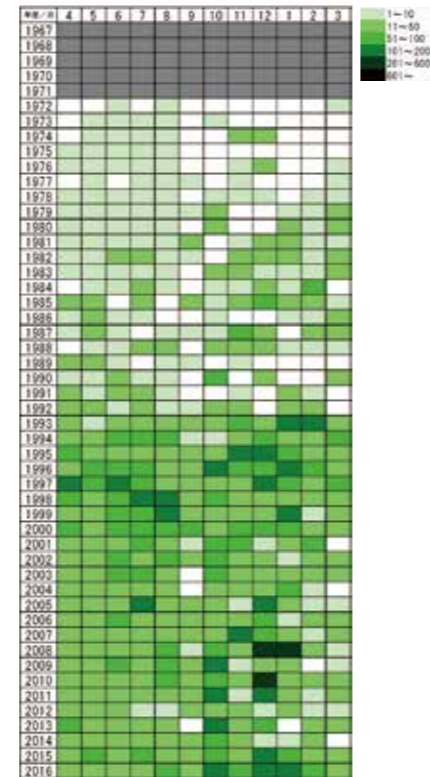
矢作川河口は調査を始めた1972年頃は春夏に10羽以下が見られる程度の種であったが、その後、徐々に秋冬にも見られるようになり数も増え始めた。特に1992年頃からその傾向がより強まり1997年がピークとなるまで急激に増加している。その後2006年まで減少している。2007年以降は、200羽から1000羽の間を推移し現在に至っている。一年の推移をみると1992年、2000年頃は春と秋に増える2つあったピークが近年は秋だけの1こぶになっている。図を見れば明らかであるように調査当初より増加している。

庄内川河口では1992年の調査当初から多く見られていたが、1997年を最大とする増減を繰り返しながら減少しつつあり、調査当初よりかなり減少している。

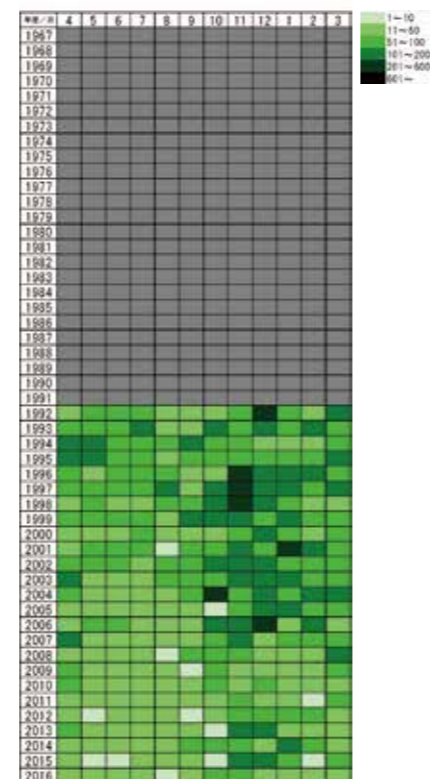
一年の推移では秋季が多く、繁殖期の春夏は減少する傾向がある。近年はその最大最小の振幅が小さくなっており、その傾向が弱まりつつある。



9. 矢作川河口



14. 庄内川河口



6. 水辺4：木曾川葛木、木曾川玉ノ井

この2つの調査地は、同じ木曾川沿いにあり、葛木は河口より16kmから20km、玉ノ井は40kmから42km程の位置にある。葛木は堤防から俯瞰する形で堤内外を調査するが、玉ノ井は堤外の河川敷を調査する。スズメの確認状況も大きく違う。

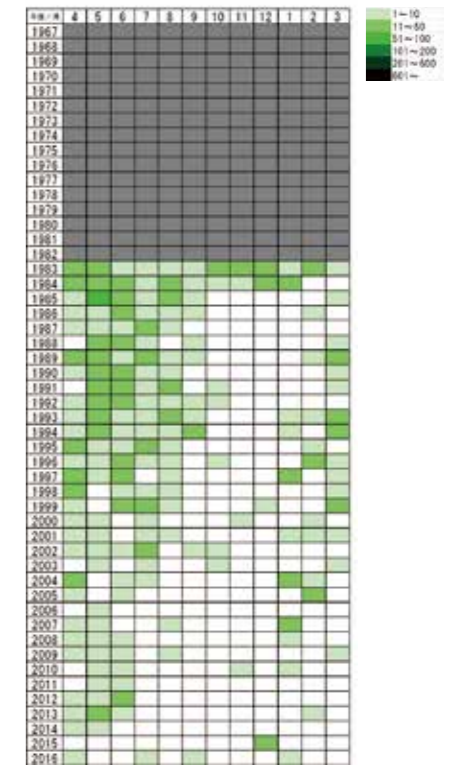
木曾川葛木は、調査当初こそ一年を通してで見られたが、その後は主に春夏に見られ、秋冬には見られない傾向にある。

1985年5月の84羽を最大に、その後は減少し見られる回数も減って近年は特に少ない。

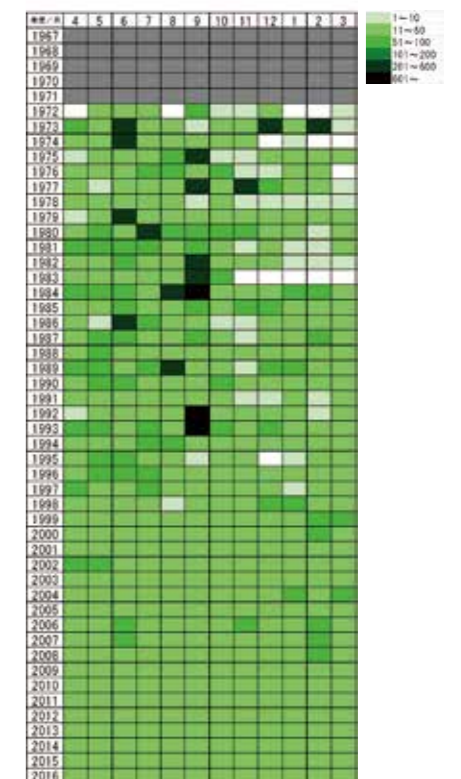
木曾川玉ノ井は、調査当初から一年を通して比較的多く見られている。1993年頃までは一年の中でも最大最小の振り幅が大きいですが、その後は変動が少なく当初よりは減少しているが、近年は安定している。



10. 木曾川葛木



11. 木曾川玉ノ井



7. 耕地・水辺 5：大山（耕地）、古山（水辺）

大山、古山とも旧渥美町（現田原市）の調査地であり、大山は、ほ場整備のすんだ山間の耕作地を中心にあつみ大山トンネルの入り口付近までを、古山は太平洋側を走る国道42号から伊良湖港、国道256号を経てほ場整備の済んだ耕作地を周るルートである。

大山は、1994年から2002年の未調査期間があるため連続性が保たれていない。

1982年から1993年の推移をみると当初から1985年をピークに増加し、その後急激に数を減らしている。

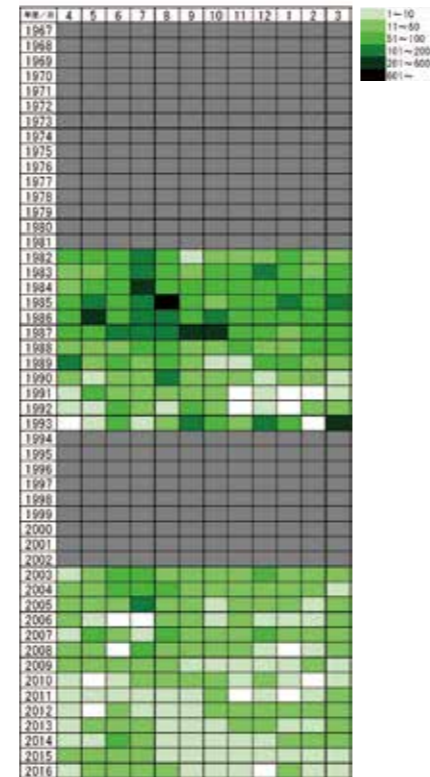
2003年の調査再開時は、前期より年間を通じてかなり数が減っている。その後、直近まで減少傾向にある。

古山は、1992年の調査当初より2003年まで少しずつ増えていく傾向であったが、2004年から急激に数を増やし、最大時は2005年に年間1400羽近くになっている。その後2015年までは多少の増減を繰り返しながら減少し、2016年はやや回復傾向にあるようである。調査当初に比べれば近年の方が数は多い。

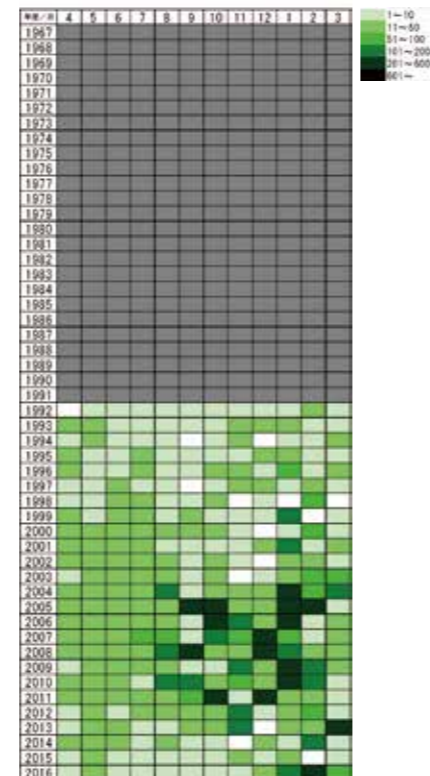
年間の推移をみると秋冬季に増え、繁殖期には減る傾向がある。



3. 大山



22. 古山



8. 山林 1：粟代、鍛冶屋敷

粟代は、北設楽郡東栄町の調査地であり、鍛冶屋敷は、旧東加茂郡（現豊田市）にある調査地である。どちらも山間の河川、県道を主とした地勢で標高の違いはあるが増減は同じような傾向がある。

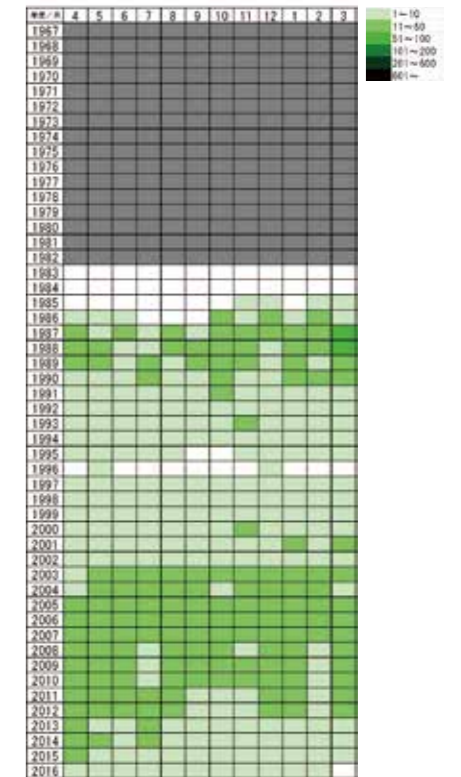
粟代は、調査当初は見られなかったが、その3年目（1985年）以降に見られるようになり、1987年から1989年をピークとして1996年が最小となるまで減少した。その後、また増加傾向に転じて、2006年を2度目のピークとして、その後は減少しつつ現在に至っている。しかし、調査当初より大きく減少しているわけではない。また、季節による変化が少ないのが特徴である。

鍛冶屋敷は、調査当初より増減を繰り返しながら増加し、2002年をピークとして減少に転じるが、増加時と同じように増減しながら減少して現在に至っている。現時点では、当初よりは増えているが、今後減っていく可能性がある。

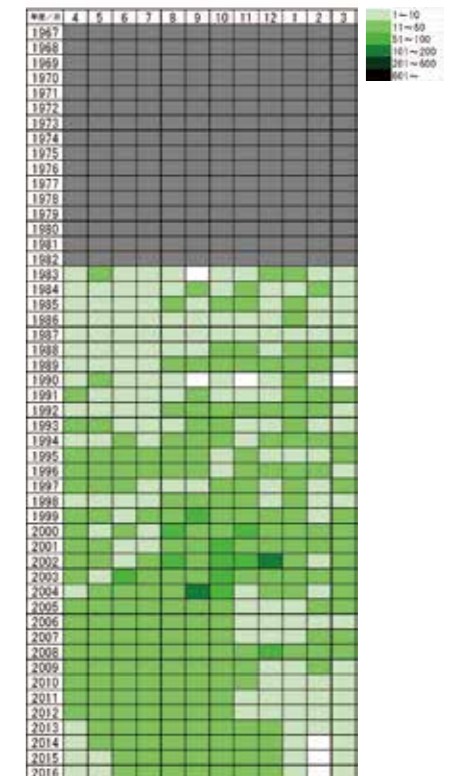
また、当初は春季より冬季に多い傾向にあるが、月日を経つにつれ、徐々に夏季を経て春季が多くなっていく傾向がある。直近4年を見ると、また春季から夏季、秋季へシフトしていくように見える。



20. 粟代



18. 鍛冶屋敷



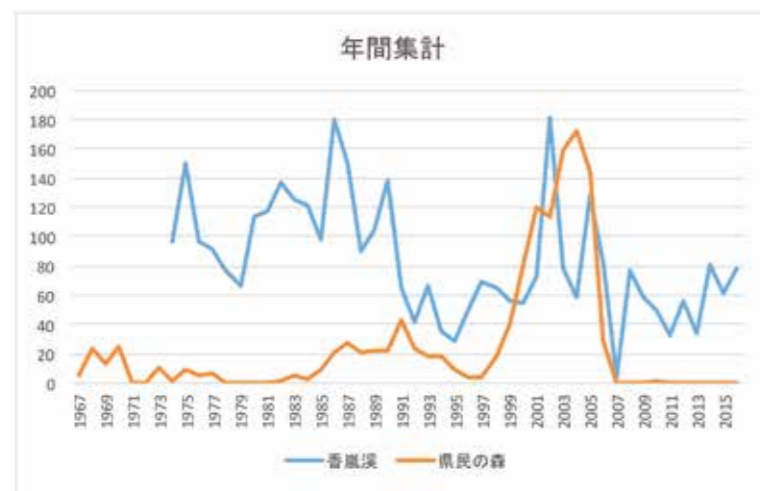
9. 山林 2：香嵐溪、県民の森

香嵐溪は、豊田市足助町、県民の森は旧鳳来町（現新城市）にある調査地である。どちらも観光地やレクリエーション施設であるため、程よく森林の環境が維持されている。

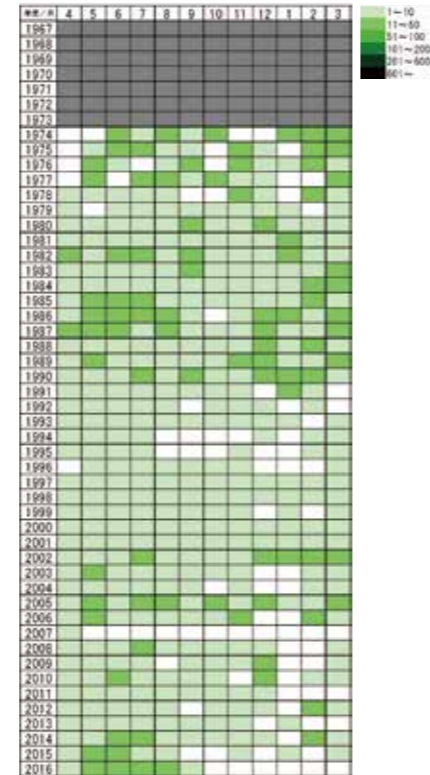
香嵐溪は、多くても1度に30羽程度であるがほぼ通年みられ、調査当初より大きな増減がない。グラフでは振幅が大きいように見えるが、図表の通りあまり差がない。

その中でも1986年、2002年に2つのピークがあり、その間の1991年から2001年頃はやや数を減らしている。その後2007年に最小となり、現在まで数を増やしつつある。1年を通して見られるが秋冬に多くなる傾向であり、顕著ではない。直近2年を見ると冬季に減る傾向になりつつある。

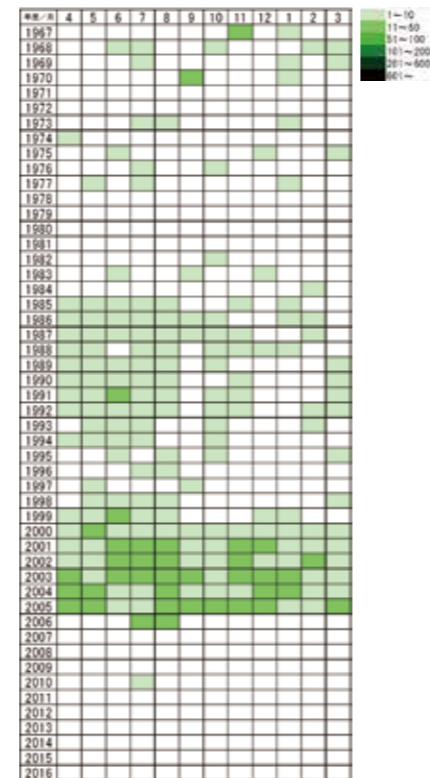
県民の森は調査当初の1967年から1984年までの18年間は年5羽程度見られる程度の種であったが、それ以降1994年までは数は少ないが比較的好くみられるようになった。その後、一時的に数を減らし、2000年から増え2005年をピークとするまで増加し、その後急激に減らし、直近の10年はほとんど見られなくなってしまった。



19. 香嵐溪



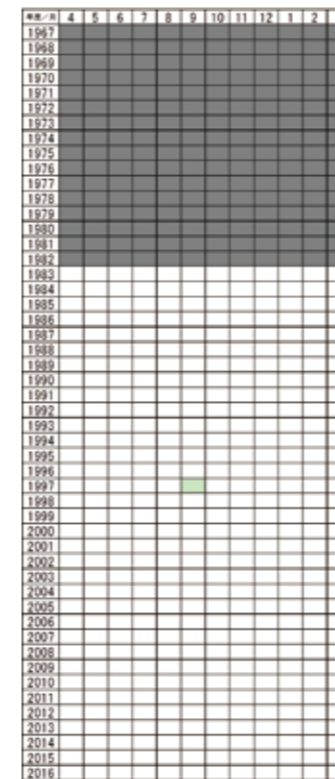
21. 県民の森



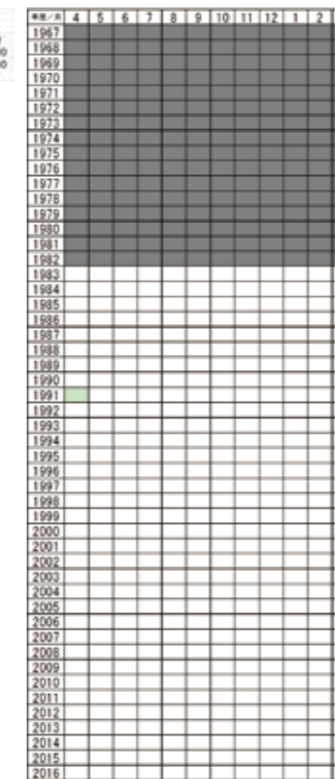
10. 山林 3：茶臼山、闇苎、段戸裏谷

どの調査地も過去にそれぞれ1度見られた程度で、スズメの繁殖及び生息する環境ではないと言える。

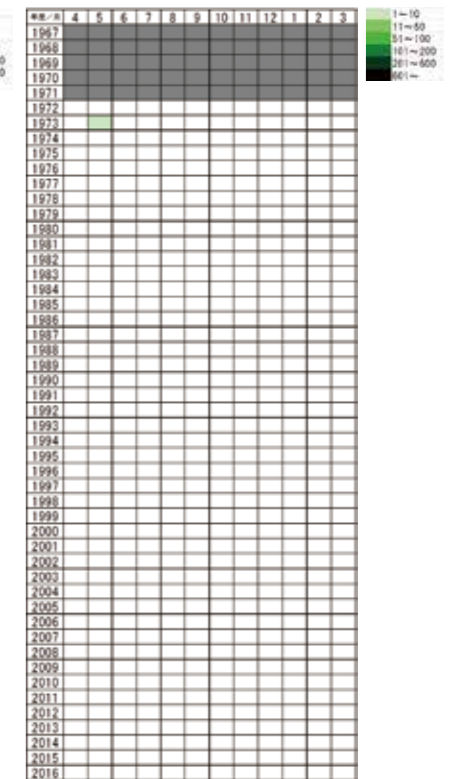
15. 茶臼山



16. 闇苎



17. 段戸裏谷



まとめ

50年の調査結果から、調査地（22地点）をその環境の遷移により都市近郊、里山、水辺、山林に分けて、スズメの推移について考察した。今回の解析では増減の幅の大きさや季節による増減などが明らかになった。また、減る傾向にある地点、増加傾向にある地点と調査地毎に特徴があることが明らかになった。

つまり、今回の長期間に渡る調査の解析結果からみると、スズメが減っているとは一概に言えないことが判明した。この調査結果に地勢、調査地毎の詳細な土地利用、植生の遷移、繁殖の状況等を含めると、さらに詳細な解析が可能である。

また、他の種との関係を調べると新たな発見がある可能性もあり、今後の解析に期待したい。

（新實 豊）

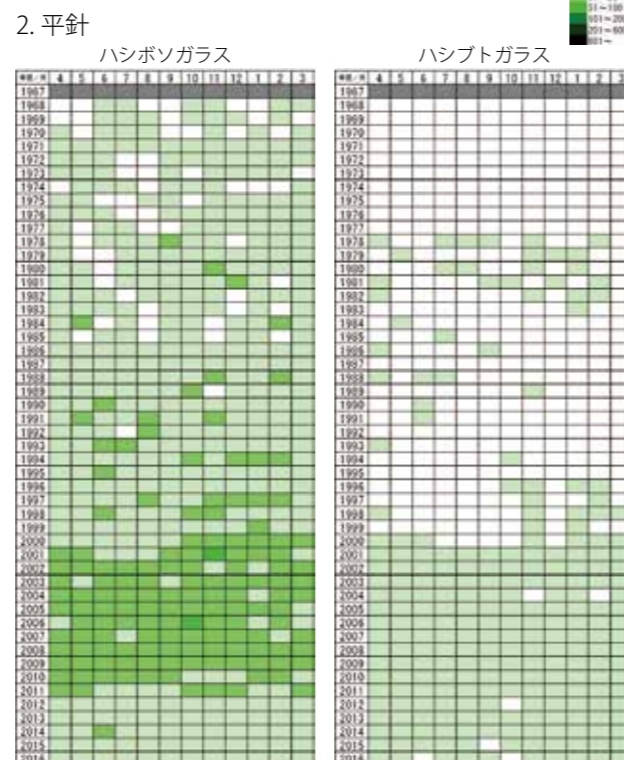
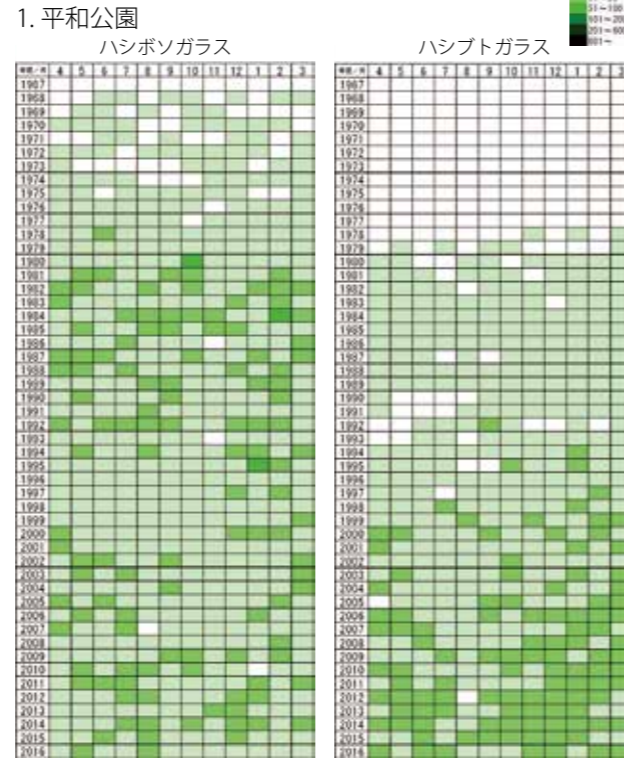
数ある野鳥の中でも、良くも悪くも最もなじみが深いと言えるカラス（ハシブトガラス、ハシボソガラス）について、50年の調査結果を地勢別に考察する。

ハシボソガラスは体長が50cmほど、細いクチバシで、「ガーガー」と濁った鳴き声の特徴のカラスで、河川敷や農耕地などの開けた環境に生息し、食性は雑食ではあるが植物質を好む傾向にある。一方、ハシブトガラスは体長が56cmほどとハシボソガラスよりやや大きく、縦に太いクチバシで、「カーカー」と比較的澄んだ鳴き声の特徴のカラスで、元来は山間部などの森林を生息地とし、ハシボソガラスと同じく雑食であるが肉食性が強い。

日本において、以前はハシボソガラスは人里、ハシブトガラスは森林と住み分けされていたが、ハシブトガラスが都市部に進出して個体数を増やし、一方、ハシボソガラスはそれに押されて個体数が漸減していると言われている。

1. 都市近郊：平和公園、平針

ハシボソガラスは1980年代から、ハシブトガラスは1990年代から、どちらも10羽未満から60羽程度と数が増えているが、それ以降は大きな増加は見られない。周辺の都市化によって、生ゴミなどのエサを採る機会が増えて増加したものの、カラス対策も同時に行われたため、それ以降の増加は抑えられたものと思われる。平針においてハシボソガラスの数が2011年以降、10羽～30羽から10羽未満へと急に減っているが、宅地化によって周辺の森林や耕地がなくなったため、ハシブトガラスに比べ種子や果実などの植物質のエサを採る傾向の強いハシボソガラスにとってエサを採る場所が減ったことが原因と思われる。



2. 耕地：大山、鍋田

大山は、1994年～2002年の間に調査が中断されていて連続性が保たれていないが、ハシボソガラスは中断前で最大149羽と再開後で最大115羽と大きな減少が見られない。

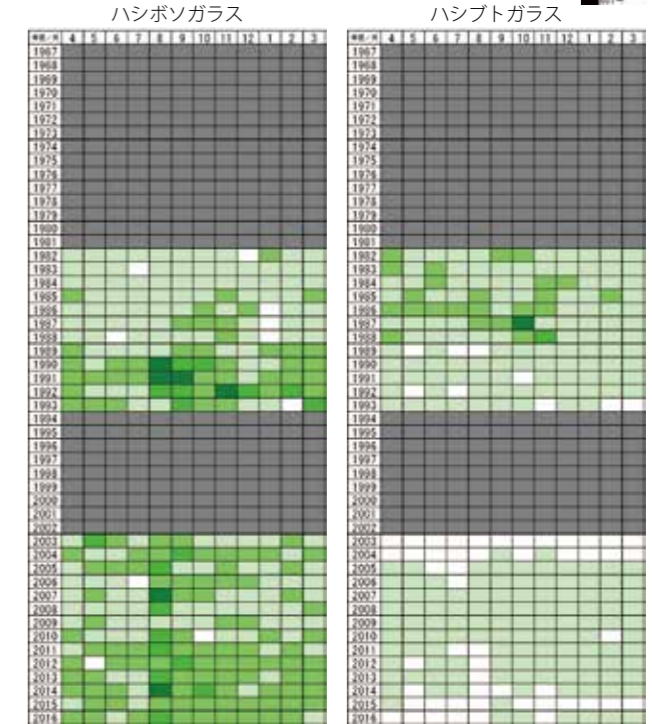
一方、ハシブトガラスは中断前は最大で134羽であったものが、再開後は最大でも10羽と大きく数が減少している。

ハシブトガラスの減少の原因は不明であるが、ハシボソガラスにとっては耕地としての環境は大きく変わっていないため数の変化もあまりないものと思われる。

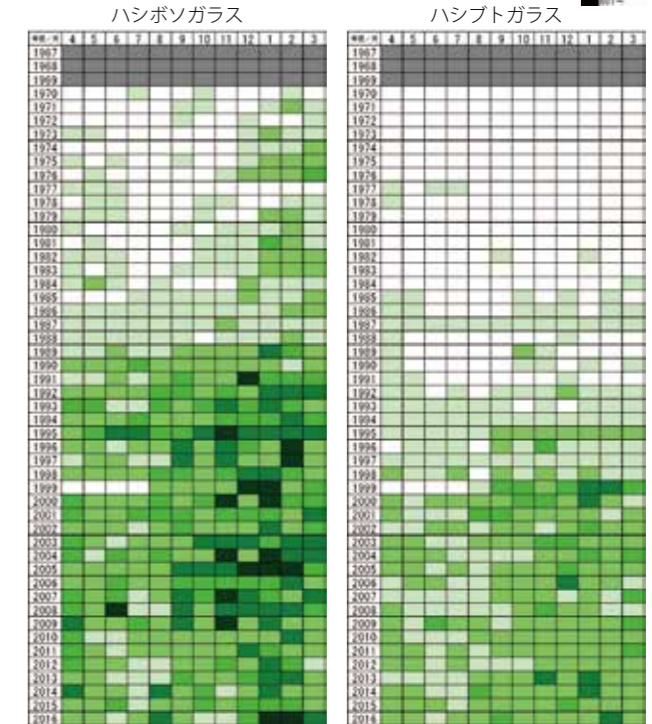
鍋田は水辺に分類されているが干拓地としてほとんどが田畑になっているため、実際は耕地に近い調査地である。ここは1990年前後を境に、ハシボソガラスが最大50羽前後、ハシブトガラスが最大12羽だったものが、1990年以降にはハシボソガラスが最大で339羽、ハシブトガラスが最大163羽と増加している。

近年、湾岸の開発により餌場となる耕地や草地が減少し、替わってエサとなる生ゴミが確保できる宅地が増えていないにもかかわらず、それ以降は現在に至るまで数が減る様子がない。原因として考えられるのは、同じく1990年頃より増加している弥富野鳥園を営巣地にしているカワウの増加である。カラスがカワウの巣から卵を盗んで食べることは良く知られており、確証はないがカワウの営巣地を食糧源として、個体数の増加と維持を凶っている可能性がある。

3. 大山



8. 鍋田



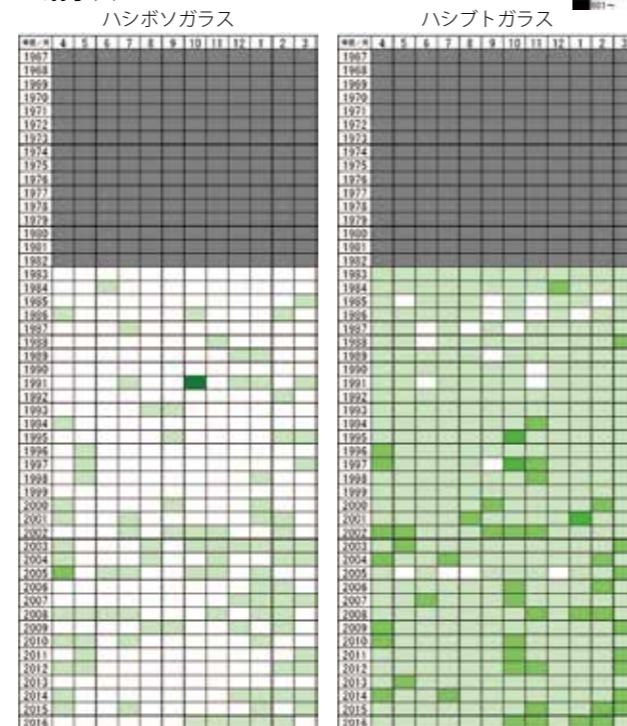
3. 里山：扇子山、東大演習林、岩屋堂

生息数の傾向が3か所でどれも違うのが興味深い。扇子山はハシボソガラスが1991年10月に150羽が確認された以外はほぼ0羽～1羽で多くとも10羽程度に対してハシブトガラスは最大が1997年10月の77羽で、他の月でも10羽前後の数が確認されているなど、ハシブトガラスの方が明らかに多い。

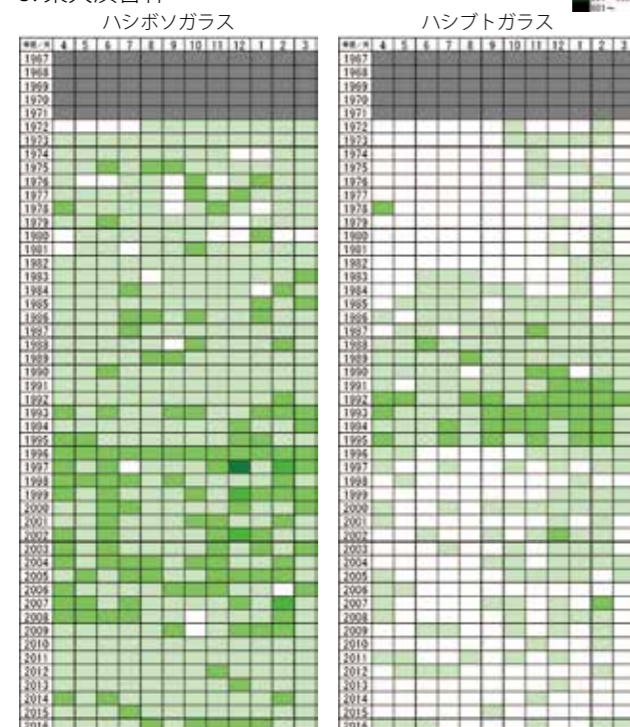
一方、東大演習林は、ハシボソガラスが1997年12月に最大143羽、他の月でも10羽～30羽程度の数が確認されている。ハシブトガラスは1980年～1990年代に10羽～30羽程度いたのが、それ以降は10羽未満で0羽の月が多いなどハシボソガラスの方が明らかに多い。

そして岩屋堂は、ハシボソガラスが2006年9月に最大11羽、ハシブトガラスが1993年10月に最大12羽以外はほぼ1羽か多くとも10羽未満と、どちらも数が少ない。これらの結果は、同じ里山でも樹木などの植生や、耕地の有無などの環境の違いが大きな要因になっているものと思われる。

4. 扇子山



5. 東大演習林



6. 岩屋堂



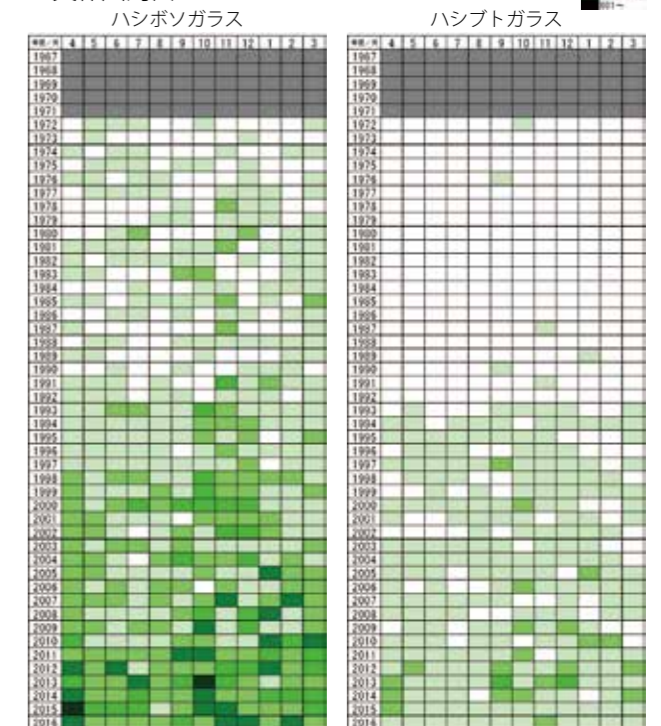
4. 水辺（河口）：矢作川河口、汐川河口、庄内川河口

矢作川河口は、1990年代を境にハシボソガラスが最大25羽から最大267羽に、ハシブトガラスが最大2羽から最大76羽と増加の傾向がある。増加の原因はわからないが、同時期にシロチドリやコアジサシの生息数の減少が始まっているので、その原因の一要因として営巣地の卵や雛を捕食するカラスの増加がかかわっている可能性がある。

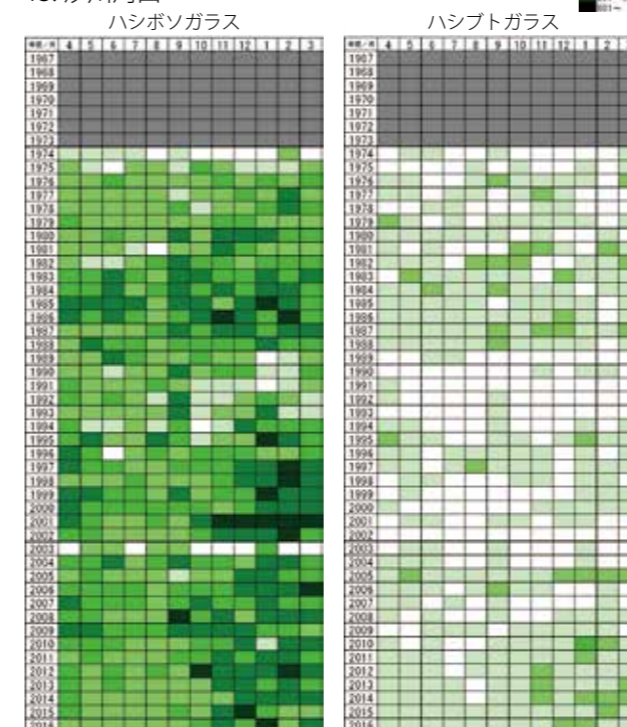
汐川河口は、年毎に波があるもののハシボソガラスが毎年最大200羽～300羽、ハシブトガラスが毎年最大20羽前後であり変化が見られない。これは、1972年より干潟が保全されており、堤防工事などがあるものの干潟としての環境にほとんど変化がないことが原因と思われる。

庄内川河口はハシボソガラスが2004年あたりを境に最大でも20羽程度だったものが50羽～100羽に、ハシブトガラスは10羽以下だったものが20羽前後の月が見られるなどやや増加している。2004年あたりから庄内川河口で増えている鳥として猛禽のミサゴがあり、カラスはミサゴが捕らえた魚を横取りすることから、ミサゴの増加によりエサが得られる機会が増えたことがカラスの増加の原因と考えられる。

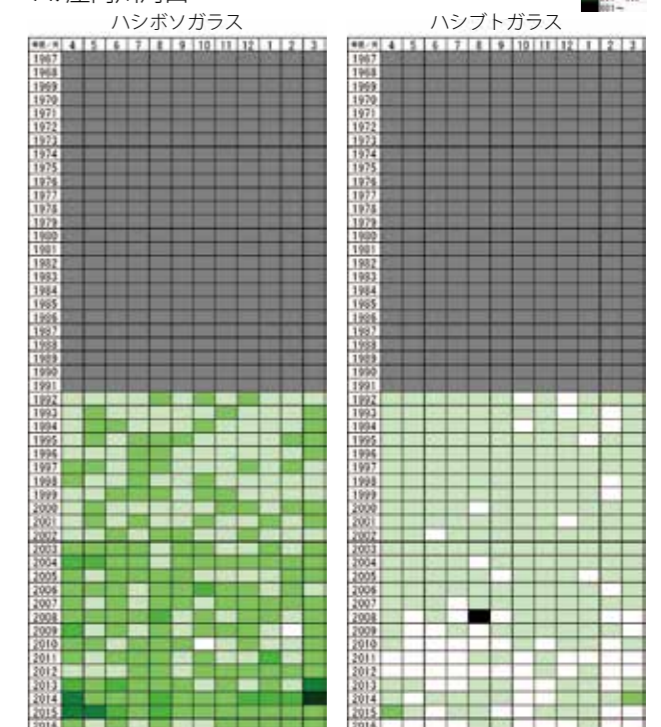
9. 矢作川河口



13. 汐川河口



14. 庄内川河口



5. 水辺（河川）：木曾川葛木、木曾川玉ノ井

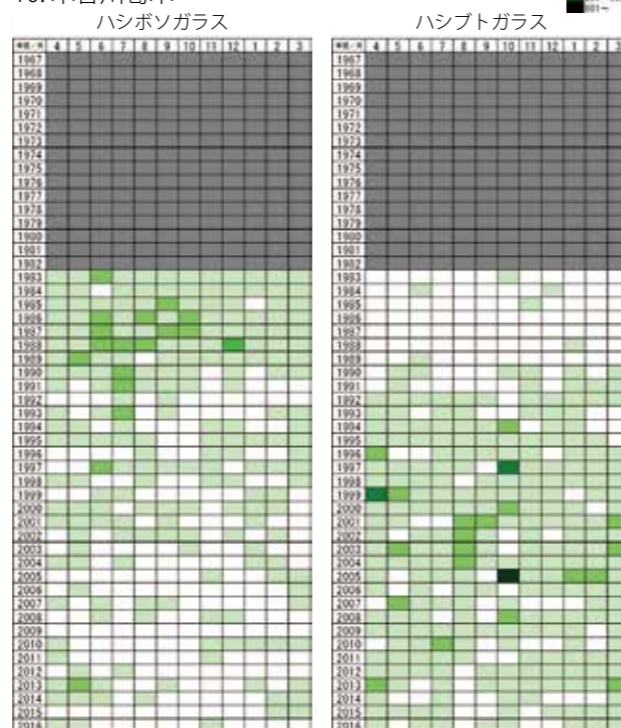
木曾川葛木は、ハシボソガラスが1988年12月に最大の58羽が確認されて以降は減少の傾向にあり、2016年には最大で9羽となった。ハシブトガラスは調査開始時の1980年代は1～2羽程度だったものが、2005年10月には541羽が確認されるまで増加し、そこからまた減少に転じて2016年では最大10羽程度になっている。ただハシボソガラスもハシブトガラスも数が多い月は極めて限られており、それ以外の月はほぼ10羽未満である。これは、エサとなるゴミが得られる公園や駐車場がないため、岩屋堂と同じくカラスの生息には好ましい場所ではないのかもしれない。

上流寄りの木曾川玉ノ井は、ハシボソガラスが1972年に最大11羽で、2016年は最大30羽、ハシブトガラスは1972年に最大2羽、2016年は最大30羽とどちらも増加している。これは、調査地周辺が公園や駐車場として整備され、ゴミが増えたのが原因と思われる。

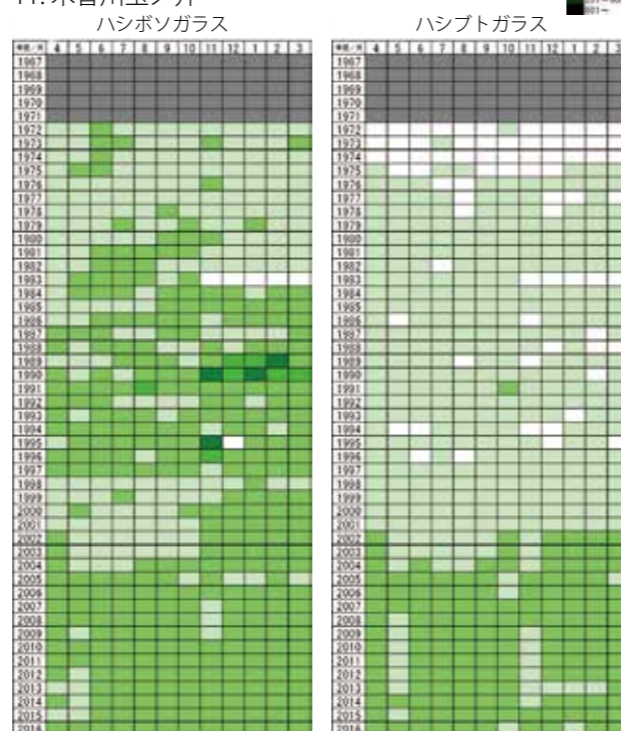


木曾川玉ノ井調査地風景

10. 木曾川葛木



11. 木曾川玉ノ井



6. 水辺（池）：鶴の山、佐布里池

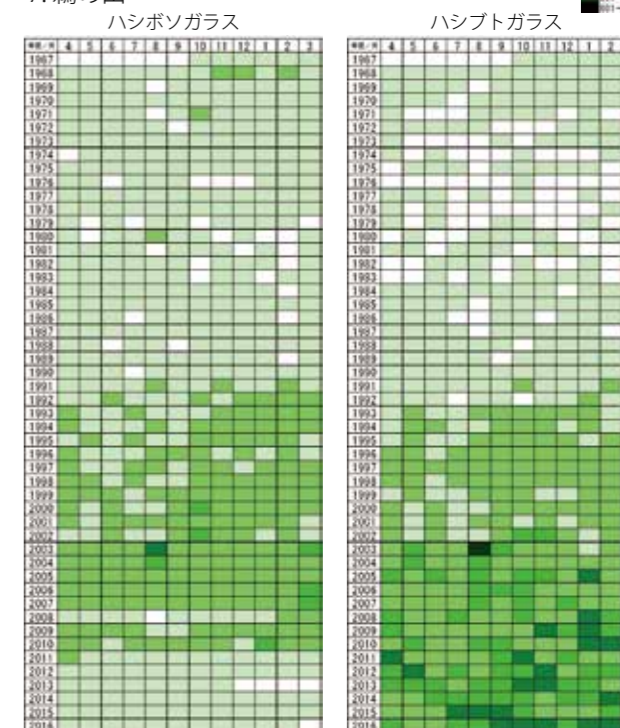
鶴の山は、ハシボソガラスが1967年の調査開始時点で最大6羽であったものが、1991年から2011年の間に20～40羽程度まで増加し、2011年以降はまた減少に転じて2016年は最大で5羽となっている。一方、ハシブトガラスは1967年の調査開始時点で最大8羽であったものがそのまま増加し、2016年の時点でも最大150羽と現在も増加の傾向にある。ハシボソガラスが減少した2011年前後でカワウの生息数も減少しており、鍋田と同様にハシボソガラスの数がカワウの生息数と関連がある可能性がある。ただハシブトガラスは増加の傾向を維持したままなのでハシブトガラスの方はカワウの生息数とあまり関連はないのかもしれない。

佐布里池では、ハシボソガラスは1992年12月、1995年1月に152羽、1998年8月に157羽、2011年3月に365羽が確認された以外は全期間を通じて10羽前後の確認しかなく、あまり多くなく増加しているとも言いがたい。一方ハシブトガラスは1974年の調査開始時に1羽だったものが2016年では最大33羽と、途中で波があるものの全体的に増加の傾向にある。2000年あたりから天敵でもあるオオタカの数が増えているが、カラスの数にはあまり影響を与えていないようである。

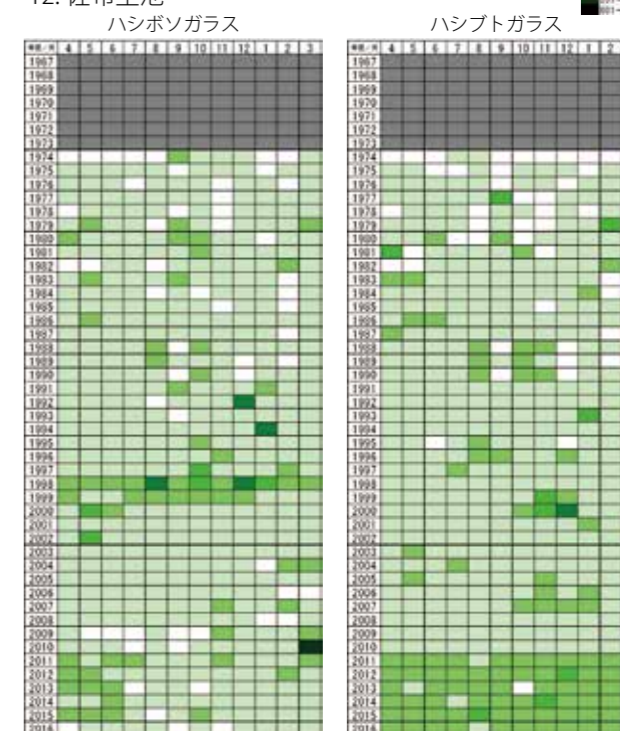


佐布里池調査地風景

7. 鶴の山



12. 佐布里池

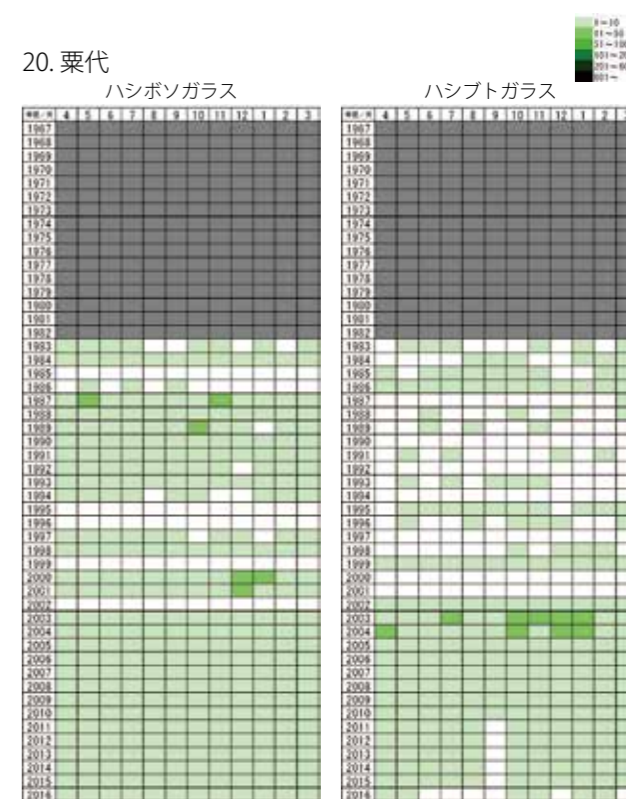
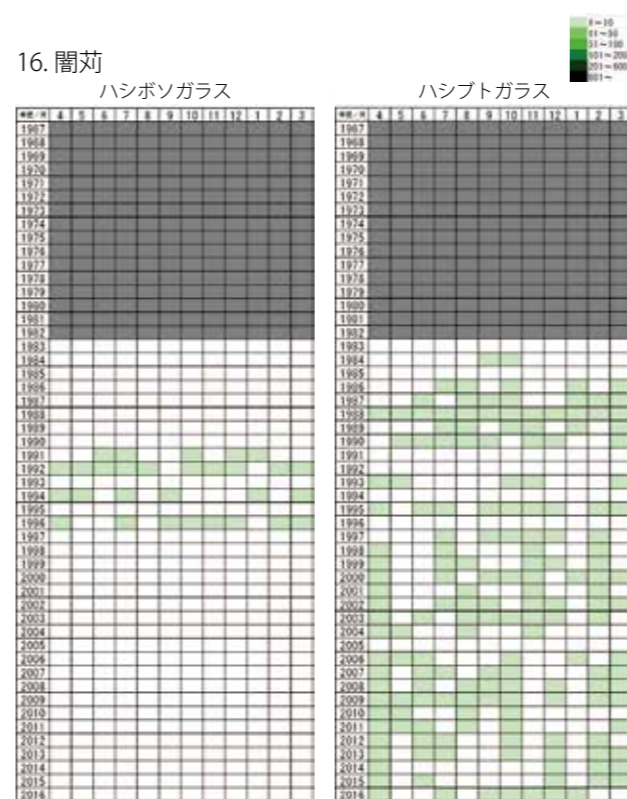
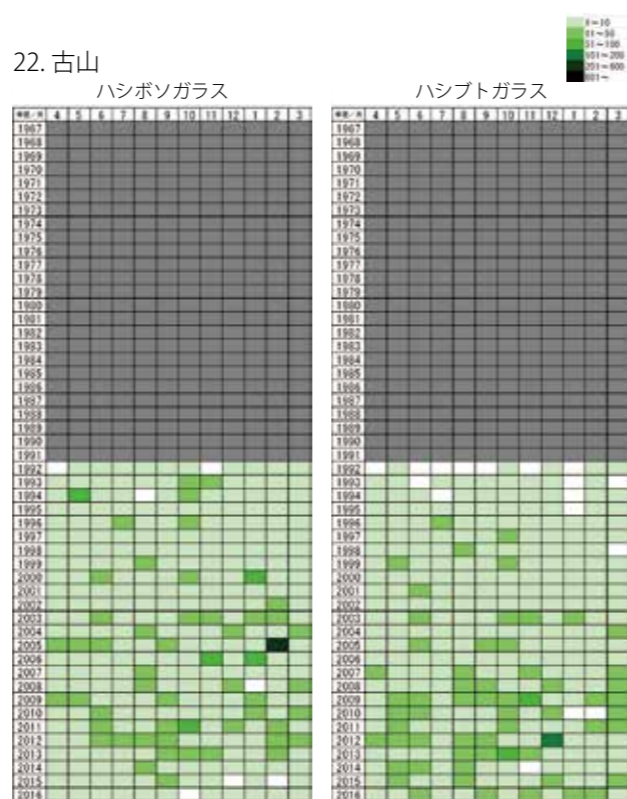


7. 水辺（海岸）：古山

ハシボソガラスは2006年2月に確認された307羽が最大で、まれに50羽くらい、それ以外は10羽前後で年毎の変動はあるものの全体的に減少や増加と受け取れる変動は見られない。一方、ハシブトガラスは、2007年度あたりから20羽以上が確認される月が増えており、やや増加の傾向にあるが原因はよくわからない。

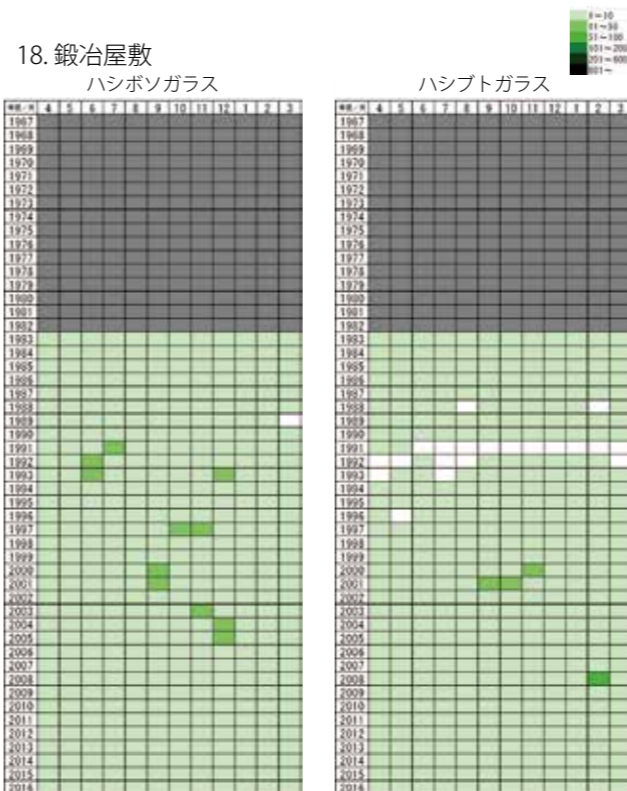
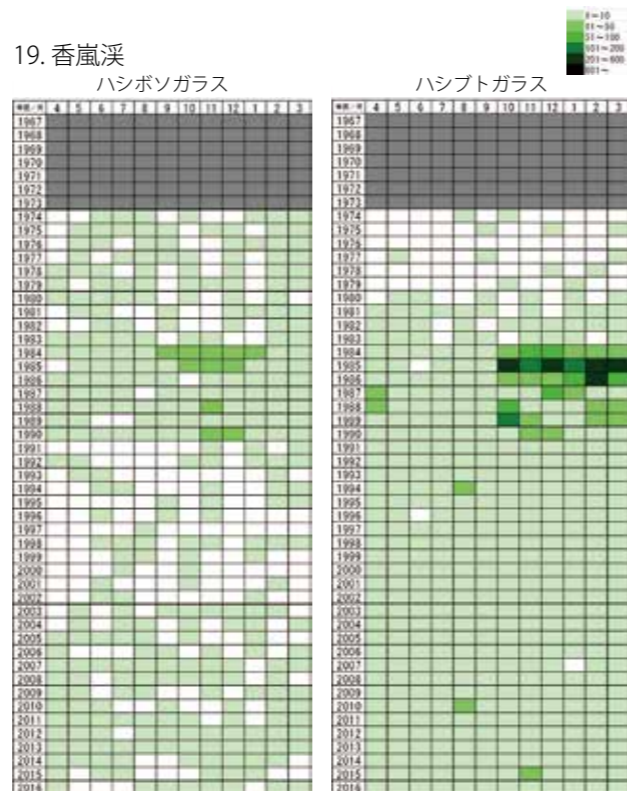


古山調査地風景



8. 山林（川沿い）：香嵐渓、閻苅、粟代、鍛冶屋敷

河川の上流部や溪流沿いが調査ルートとなるこれらの調査地では、ハシボソガラス、ハシブトガラスの観察数はほぼ全期間で10羽未満で10羽以上の数が見られる回数は非常に少ない。ハシボソガラスとハシブトガラスの数の比率も、鍛冶屋敷と粟代はほぼ同程度、香嵐渓はハシボソガラスの方がやや少なめで、閻苅ではハシボソガラスは1991～1996年の間に数羽が見られただけで以降は全く確認されていない。そのため、全体としてハシブトガラスの方が数が多いようである。また、香嵐渓では1984年から1990年の秋から冬にかけてハシボソガラスが最大30羽、ハシブトガラスが400羽と急激に数が増加し、それ以外の月は元の10羽未満の状態に戻っている。何が原因でその期間だけ数が増加していたのか興味深いところである。



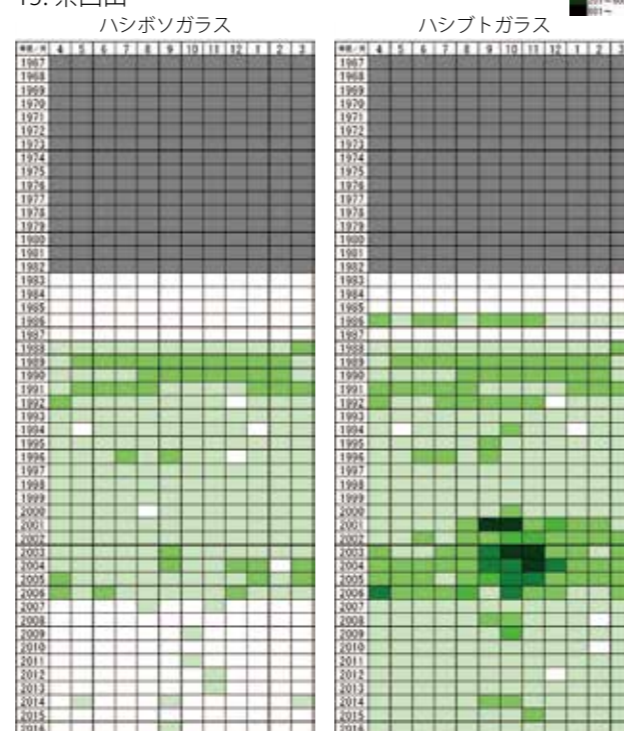
鍛冶屋敷調査地風景



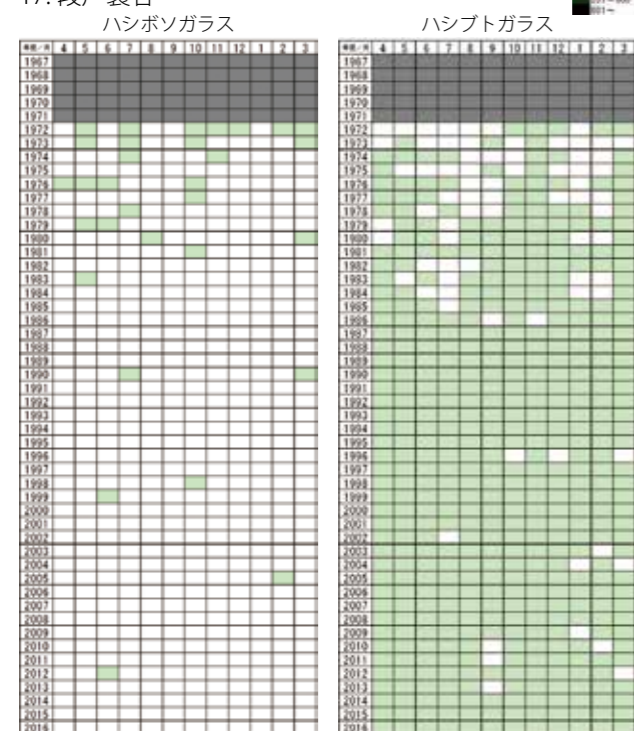
香嵐渓調査地風景

9. 山林(森林)：茶臼山、段戸裏谷、県民の森
山道が調査ルートとなるこれらの調査地においても、8の山林(川治い)調査地と同様にほぼ全期間を通じてハシボソガラス、ハシブトガラスともに10羽未満で10羽以上が見られる回数は非常に少ないという結果となっている。ハシボソガラスとハシブトガラスの数の比率については、確認数0羽の月がハシボソガラスの方が多く、最新の2016年においては2羽確認された程度で、こちらもハシブトガラスの方が多くなっている。また茶臼山において、香嵐溪と同様に2000年から2006年の間に最大250羽に急激に増加してまた元に戻っている時期が見られる。

15. 茶臼山



17. 段戸裏谷



21. 県民の森



まとめ

2016年度の最大確認数を基にハシボソガラス、ハシブトガラスの調査地別の生息数を比較すると、ハシボソガラスの方が多い調査地が8ヶ所(平針、大山、鍋田、東大演習林、岩屋堂、矢作川河口、汐川河口、庄内川河口)、ハシブトガラスの方が多い調査地は13ヶ所(平和公園、扇子山、鶴の山、木曾川葛木、佐布里池、古山、茶臼山、闇苅、段戸裏谷、鍛冶屋敷、香嵐溪、粟代、県民の森)、同数が1ヶ所(木曾川玉ノ井)と、ハシブトガラスの方が多く見られる調査地の方がやや多い。開始年にずれがあるのでやや不正確になるが調査開始時点では、ハシボソガラスの方が多い調査地は17ヶ所(平和公園、平針、東大演習林、岩屋堂、鍋田、矢作川河口、木曾川葛木、木曾川玉ノ井、佐布里池、古山、汐川河口、庄内川河口、闇苅、段戸裏谷、鍛冶屋敷、香嵐溪、県民の森)、ハシブトガラスの方が多い調査地は4ヶ所(大山、扇子山、鶴の山、茶臼山)、同数が1ヶ所(粟代)であり、50年間でハシブトガラスとハシボソガラスの分布が逆転している。

一方、各調査地の最大確認羽数を合計すると2016年度ではハシボソガラスが909羽、ハシブトガラスは515羽なのに対し、調査開始時点ではハシボソガラス141羽、ハシブトガラスが122羽であることから、50年間で数においてはハシボソガラスがハシブトガラスに対して2倍近い差をつける結果となっている。日本国内ではハシブトガラスが増加し、ハシボソガラスは漸減していると言われているが、50年間の調査結果を見る限り愛知県内の分布範囲ではハシブトガラスが優勢になっているものの、生息数ではいまだにハシボソガラスが優勢であるということになる。ただ、都市部の調査地が平和公園と平針の2ヶ所だけなので、主に都市部で数を増やしていると言われているハシブトガラスの数が十分に把握されていない可能性があり、実際は数においてもハシブトガラスが上回っていることも考えられる。

(秋山 幸之朗)



ハシボソガラス



ハシブトガラス



1 平和公園 (へいわこうえん) — 都市近郊 —



1 調査地について

名古屋市の東部丘陵地帯に位置する「平和公園」は、面積約 147ha の墓地公園で、その南には東山公園があり、動物園・植物園から“天白溪”の森へと続き、市街地の一画にまとまった面積を持つ緑地帯を作り出している。

西端に猫ヶ洞池（面積約 6.5ha）を有する北部地区（面積約 97ha）は、桜の園やメタセコイア広場等の公園緑地に囲まれ、文字通り墓地公園を形成しているが、通称“市民の森”と呼ばれる二次林の広がる南部地区（面積約 50ha）は、希少な湿地性の動植物の存するハンノキ湿地や、溜池、水田、畑地等、多様な環

境が広がっている。

また、東山動物園で飼育されているコアラの餌となるユーカリ林が公園内の数か所に点在している。

北部地区の猫ヶ洞池は、名古屋市内に残る溜池のひとつで、現在は農業用溜池としての使命は終えているものの、市内を流れる山崎川の源流であり、雨水調整池としての役割も果たしている。岸辺の南側は、階段状の釣り場として整備されたものの、北側にはまだ自然護岸が維持されており、少ないながらもヨシ原も残されている。

このヨシ原を残すべく、2008 年より、

「日本野鳥の会愛知県支部」、「なごや東山の森づくりの会」等により、ヨシ刈り、ゴミ拾い等のヨシ原再生活動が年 1 回のペースで行われている。

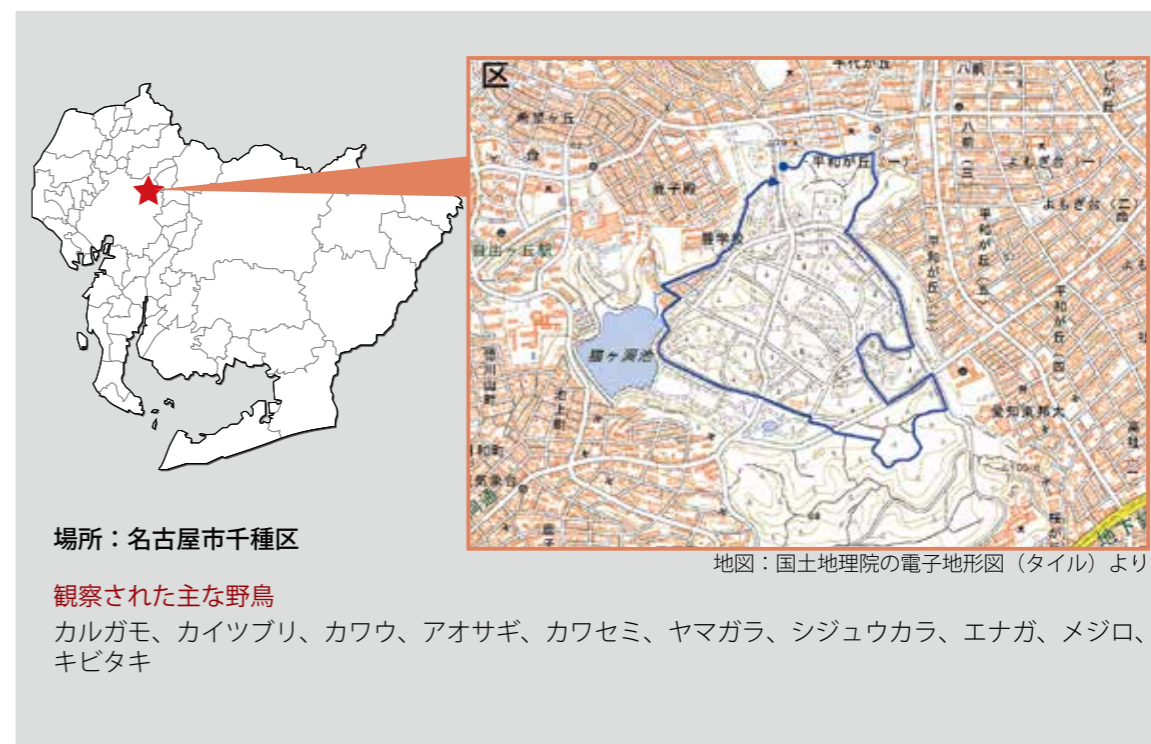
南部地区に広がる樹林は、戦後、薪炭林として利用すべく自然林を伐採して形成された二次林で、アカマツ等の常緑針葉樹、ソヨゴ、ヒサカキ等の常緑広葉樹、コナラ、アベマキ、ヌルデ、ヤマウルシ、ネジキ、ハンノキ、コバノミツバツツジ等の落葉広葉樹が混在し、特に、“市民の森”は落葉広葉樹が多く、里山の雑木林としての景観を、現在なお保っている。

一時期、乾燥化が進んでいたハンノキ湿地は、「なごや東山の森づくりの会」により、周りの湧水を引きこむなどして、溜池として再生され、湿地特有の希少な動植物の生息場所としての役割を保っている。

また、戦後長らく耕作が続けられていた“市民の森”南側に東西に続く谷筋の湿地帯は、耕作地の買い上げ後、一部が芝地とされた以外は、多くが笹やクズ等に覆われたままとなっていたが、現在は、溜池や水路、水田、畑地等が造成され、やはり「なごや東山の森づくりの会」の手により、稲作や畑地の耕作、湿地やヨシ原の整備等が行われている。

起伏のある地形に加え、以上のように多様な環境に恵まれ、東海地方特有の種や希少種も含めた多様な動植物が残り、通算 176 種（及び、外来種・野生化した飼育鳥 8 種 2017 年 3 月現在）、年に 70～80 種ほどの野鳥が確認されている。

現在、平和公園北部地区から東山公園南部地区までの約 410ha が、“なごや東山の森”として、市民と行政が協働で守り育てていく“森”と位置付けられている。





2 平針 (ひらばり)

— 都市近郊 —



1 調査地について

調査地「平針」は、名古屋市天白区に在する荒池緑地を中心に名古屋市の南東部に位置し、日進市の丘陵地に隣接している。名古屋市の農業センター、県の運転免許試験場、平針住宅団地、荒池や大堤池等が点在している。

荒池緑地の植生はコナラやアベマキなど落葉広葉樹林が大部分を占め、竹林が混在する緑地であるが、近年竹林の拡大があり雑木林が少なくなっている。また、小田赤池線の道路開通から11年となり自動車の通行量が増え周辺の宅地開発が急速に進み、緑地の面積は10年前に比

べ30%ほどになっている。

繁殖する鳥の種類は20種を数えているが、農地や雑木林、耕地などのヒバリやホオジロの繁殖地がなくなったことで、姿を消している。

年間を通じ冬期の野鳥は種類・数が増えている。細口池はオオジュリンがねぐらに利用している。オオバンはどこでも増えている。大堤池にはオカヨシガモを間近で観察でき、荒池ではオシドリやミコアイサが増えている。

一方、カラスやムクドリが急増し、地元嫌われている。

小田赤池線の道路開通により自動車の交通量が増えたことで、当地では普通種であったキジやコジュケイ、ホオジロ、ヒバリ等は今ではほぼ姿を見ることができなくなっている。

平針小学校の野鳥部の子供達と毎月1回の観察会で野鳥の種類と数の調査を続けている。冬期には餌台の整備をして春には繁殖のための巣箱を掛けることで、シジュウカラ、ヤマガラ等の繁殖が観察されている。巣箱は毎年5個新設し、2～3個繁殖に利用されている。

調査地のルートは、細口池からスタートして大堤池を廻り、針名神社を通り抜け、農業センターの西側外周から荒池緑地、荒池へ向かって運転免許試験場から細口池へと一回りしている。

細口池は、平針住宅団地の真ん中に位置し、周囲300mのジョギングコースになっており、桜に囲まれた整備の行き届いた小さな池である。

池の中は葦とヒメガマが生い茂り、バンとオオヨシキリが繁殖しており、巣作りから子育てまで間近に見られる。

珍しいところでは、春のコヨシキリ、冬のおオジュリンがねぐら、餌場としており、クイナやヒクイナ等も住み着くことがある。

大堤池は、針名神社の西に位置し周囲200mの小さな池であるがカイツブリやバンが繁殖しており、冬期には各種のカモが見られる。

特にオカヨシガモ、ホシハジロの捕食の仕方などが楽しく観察できる。他にコガモ、マガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、オオバン、バンが間近に見られる。

針名神社には、比較的大きな木が茂り、杉の大木にはハシボトガラスが繁殖している。一方、神社の周辺にあるコナラにはハシボソガラスが巣作りしている。

そのほか、コゲラやカワラヒワ、メジロ、ヒヨドリ等が繁殖しており、平針小



場所：名古屋市天白区

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

オシドリ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、ハシビロガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カイツブリ、ハジロカイツブリ、クイナ、ヒクイナ、バン、オオバン、カワセミ、コゲラ、ハシボソガラス、ハシボトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、メジロ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、シロハラ、ルリビタキ、ジョウビタキ、カワラヒワ、カシラダカ、アオジ、オオジュリン



3 大山 (おおやま)

— 耕地 —



1 調査地について

渥美半島の大山(渥美山塊)にオオルリ、キビタキ、ハチクマやオオタカが生息することに気づいたのは1986年のことである(参考文献1及び2)。

本野鳥生息調査で、調査地を「大山」に変更すると同時にオオルリや里山の猛禽類が観察されたことは、これらの野鳥(主に夏鳥を指す)が以前から生息していたことを物語っている。このことは近くに住む住民からの聞き取りとも一致している。

大山は1970年代まではアカマツ林が優占していたが、80年代以降松枯れ及びその後の植生遷移の進行によりコナ

ラ、クロバイ等の広葉樹が優占してきた。このことは動物食性小鳥類(夏鳥)には好適な環境となってきた一方、ハチクマ、オオタカ、サシバなど里山猛禽類の営巣適地や営巣木を失わせ、その減少の一因ともなっている。実際「渥美半島大山での猛禽類繁殖に関わる調査記録から」(参考文献2)では1986年以降2008年まではサシバ、オオタカ、ハチクマのいずれか、もしくは複数種の繁殖成功の確認・成功の可能性が確認されているが、2009年以降は繁殖を試みた可能性ありに留まっている。

参考文献1には大山(渥美山塊)で

1989年から1999年に観察された種と日にちが鮎川上流、清田池、泉福寺、椈と4カ所に分けてリストアップされている。このうち椈が現大山調査地とほぼ一致している。

そこには、ミサゴ、ハチクマ、オオタカ、ツミ、ノスリ、サシバ、ハヤブサの7種の猛禽類が記録されている。この調査期間中の1992年にオオタカとサシバ、1994年にハチクマの繁殖が初めて確認された。

小鳥類ではカッコウ科でジュウイチ、ツツドリ、ホトトギスが記録されておりホトトギスについては繁殖が確実となっている。

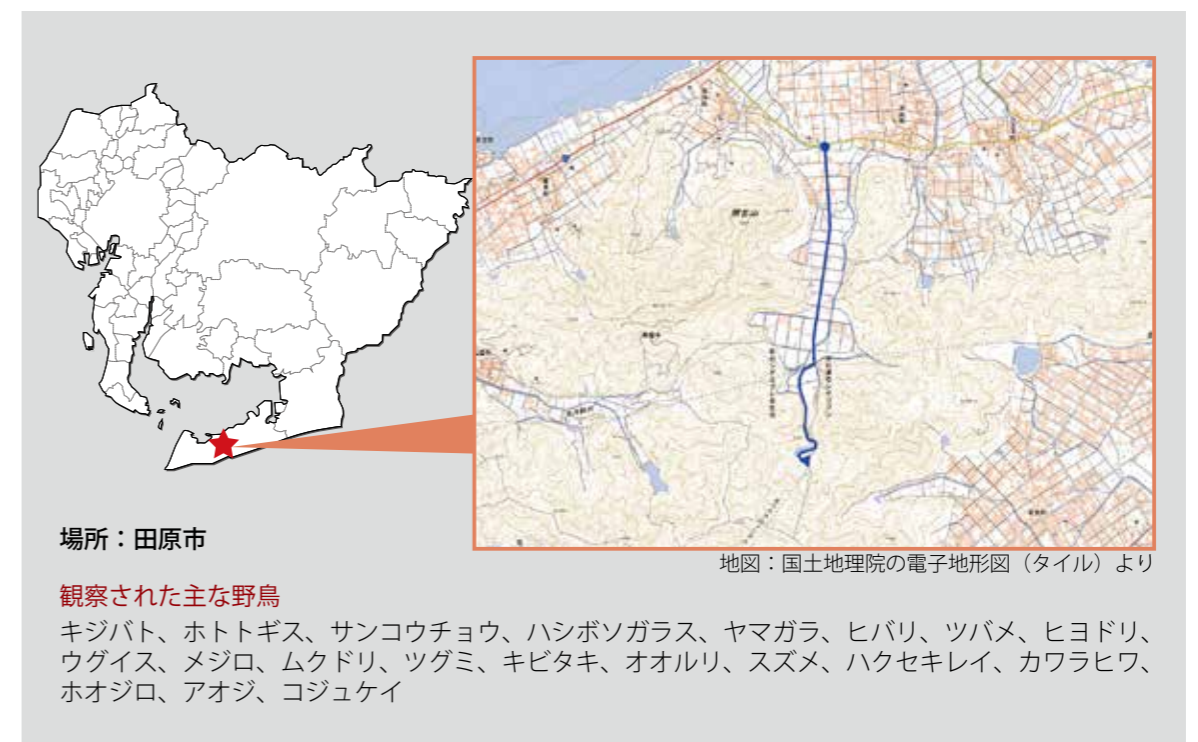
カワセミやアリスイも比較的良く見られたが、最近では出会うことがなくなった。アオゲラ、アカゲラ、コゲラは微妙に増加している印象を持っている。1990年5月にはサンショウクイの記録もある。

ウグイス科のヤブサメの記録があるが近年は確認していなかった。高齢化による調査者の聞き取り能力の劣化ではとの指摘を受け、40代の女性と一緒に調査したところ、彼女はヤブサメを確認することができた。

ヒタキ科ではアカハラ、コルリ、キビタキ、オオルリが、カササギヒタキ科ではサンコウチョウが記録されている。サンコウチョウは顕著な増加傾向が見られ、4カ所以外の大山の麓、平地の神社、畑に隣接する山林にまで進出している。

参考文献

1. 大羽康利(2004) 渥美山塊の野鳥、蟲譜 VOL.43 NO.1 三河生物同好会
2. 大羽康利(2012) 渥美半島大山(渥美山塊)での猛禽類繁殖調査に関わる調査記録から、蟲譜 VOL.50 NO.2 三河生物同好会





4 扇子山 (せんすやま) — 里山 —



1 調査地について

調査地「扇子山」は、岡崎市の市街地から南南東へ約 11km、蒲郡市に隣接する岡崎東部鳥獣保護区内にある。岡崎市桑谷町地内にある桑谷キャンプ場の駐車場を起点とし、坂口池を経て山頂まで設けられている自然歩道往復約 9km を調査区域としている。

標高はおよそ 130～430m で、キャンプ場付近は農耕地・ため池・沢などバラエティに富んだ里山環境であるが、林相はスギ・ヒノキの植林がほとんどで単調である。それに対し、山頂部周辺は広葉樹を主体とした雑木林が広がっている区域もあり、自然観察で散策するにはもって

こいのエリアである。

9～10月にかけては、サシバ・ハチクマを中心としたタカ類の渡りルートになっているので、訪れるバードウォッチャーも多く、「西三河のホークマウンテン」とも呼ばれている。当地での調査は、1983年から35年間続けられてきた。初年度から清水敏弘が継続して実施しており、現在(2017年11月)までのところ14目36科104種を記録している。

調査を開始して5年目あたりから、旧桑谷山荘から西へ延びる林道(車両通行用)が造成され、竜ヶ谷池につながったた

め、調査区域の自然環境が一変した。山が削られ樹木が伐採されて、自然歩道の一部が跡形もなく消滅した区間もある。したがって、やむなく調査ルートを変更せざるを得ない状況にも追い込まれた。

こうした経緯もあり、調査が10年経過したのを契機に1993年からは下山コースを変更した。具体的には、坂口池に流れ込む沢の西側尾根を越えた谷筋を帰路ルートとし現在に至っている。また、2005年頃には坂口池源流部の東側尾根に、高圧線鉄塔が建設され、電力の供給が始まった。この工事でも鉄塔建設現場周辺の山林は広い面積にわたって伐採され、工事用車両が通る林道も造成されるなどしている。電力供給という市民生活の基盤となることとはいえ、扇子山山系に残ったその傷跡は消えることはない。当時、この現場近くの沢では6月にホタルの発生が確認されていた。

2 扇子山における特徴的な変化

本調査地は、里山の自然環境が残るエリアであるが、35年の年月が経過して最も大きく変化しているのは、森全体の樹木の生長と山系全体の植生遷移である。調査開始当時、植林して間もない高さ1m弱のスギ・ヒノキ林は、今では直径25cmを超え、調査ルートの中腹から見えた坂口池はまったく視界から消えてしまっている。当然、広葉樹の雑木林も樹高が伸び、森林としての重厚感が増大してきており、それに伴って鳥相も変化している。

ウグイスとホトトギス

繁殖期4～8月の5か月間について、ウグイスとホトトギスの「期間総個体数」を比較したグラフが図1である。これを見ると、1983年から35年間でウグイスは平均約20羽から100羽と約5倍に増加している。また、ホトトギスも平均2

場所：岡崎市

地図：国土地理院の電子地形図(タイル)より

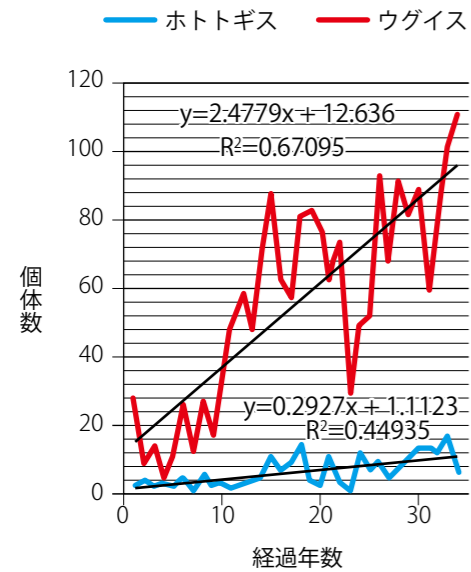
観察された主な野鳥

春夏：ホトトギス、サンショウクイ、サンコウチョウ、ヤブサメ、センダイムシクイ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ 秋冬：ミソサザイ、シロハラ、ルリビタキ、ジョウビタキ、マヒワ、ウソ、アオジ、クロジ 通年：コゲラ、アオゲラ、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ホオジロ 春秋の渡り：ハチクマ、ツミ、サシバ、ノスリ



羽から 12 羽と 6 倍に増えている。両種は「托卵・被托卵」の関係にあり、托卵される側のウグイスの増加に伴い、托卵鳥のホトトギスの生息数が増えている。

図1 ウグイスとホトトギスの関係



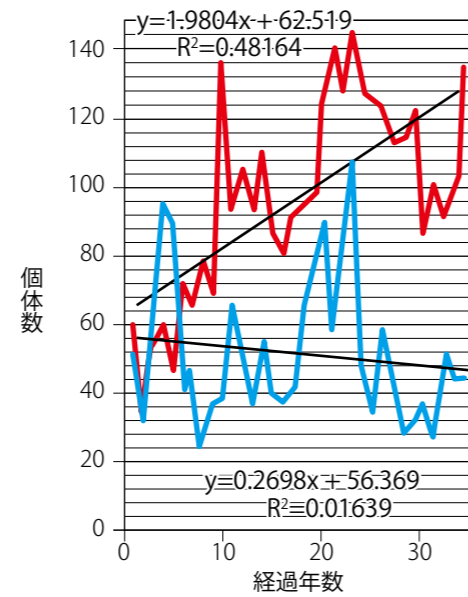
これは扇子山山系が低木林から混交林に遷移し、ウグイスにとって好適な生息環境になってきたことが最も大きな原因と考えられる。両種の生息数増加は森林全体の生長と密接な関係があるといえる。

ヤマガラとシジュウカラ

両種についても、図2にみられるように、顕著な生息数の変化が認められる。ヤマガラはシイ・カシ類を主とする暖帯林を好み、扇子山山系では優占種の一つである。調査開始後35年間で両種の「年間総個体数」を比較すると、ヤマガラは平均約60羽から130羽に増えているのに対し、シジュウカラは平均約60羽か50羽に減少している。これは山系の暖帯林群落がより深くなってきたことで、ヤマガラの生息には適した環境になったが、明るい温帯

林を好むシジュウカラにとっては、棲みにくい環境になっていることが推測される。

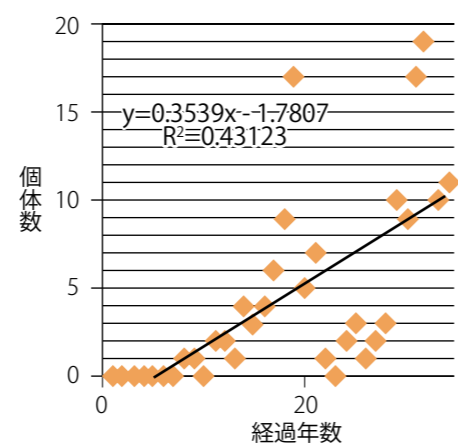
図2 シジュウカラとヤマガラの関係



クロツグミ

クロツグミは、落葉広葉樹林からスギ、ヒノキなどの針葉樹林まで幅広く分布する夏鳥である。扇子山ではこうした林相が年々充実し、本種の生息数増加の大きな要因になっている。

図3 クロツグミの個体数変化

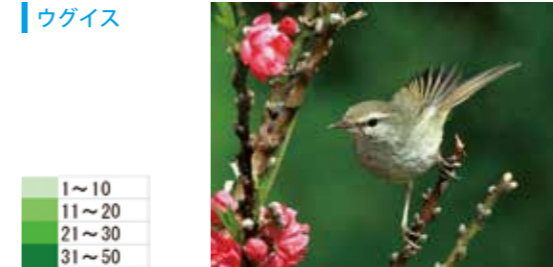


これらの結果から考察すると、県の鳥類生息調査において生息数のカウントはもちろんであるが、今後は数年おきに調査地の植生環境も併せて調べていくことが望まれる。例えば、里山・山地であれば、

国の「モニタリング1000」で実施しているような「植生概況調査」を導入することで、林相の定性的・定量的把握ができ、鳥相の変化をより科学的に分析できるのではないだろうか。

(清水 敏弘)

ウグイス



1~10
11~20
21~30
31~50

ホトトギス



1~4
5~10

年度/月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1967												
1968												
1969												
1970												
1971												
1972												
1973												
1974												
1975												
1976												
1977												
1978												
1979												
1980												
1981												
1982												
1983												
1984												
1985												
1986												
1987												
1988												
1989												
1990												
1991												
1992												
1993												
1994												
1995												
1996												
1997												
1998												
1999												
2000												
2001												
2002												
2003												
2004												
2005												
2006												
2007												
2008												
2009												
2010												
2011												
2012												
2013												
2014												
2015												
2016												

年度/月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1967												
1968												
1969												
1970												
1971												
1972												
1973												
1974												
1975												
1976												
1977												
1978												
1979												
1980												
1981												
1982												
1983												
1984												
1985												
1986												
1987												
1988												
1989												
1990												
1991												
1992												
1993												
1994												
1995												
1996												
1997												
1998												
1999												
2000												
2001												
2002												
2003												
2004												
2005												
2006												
2007												
2008												
2009												
2010												
2011												
2012												
2013												
2014												
2015												
2016												



5 東大演習林 (とうだいえんしゅうりん) - 里山 -



1 調査地について

調査地「東大演習林」は、名古屋市の北約 35km、入鹿池の北西約 2kmの尾張丘陵地帯にあり、犬山公園小牧線の西町橋を起点として、新郷瀬川を合戦橋まで行き、東へ集落を横切り県道にでる。大黒下池、大黒上池を通り犬山カントリー倶楽部を過ぎ、明治池、大畔池を通り、犬山病院前より犬山里山学センターの前を通り今井小学校までの約 7kmが調査ルートである。

調査は 1972 年から現在まで奥長幸治、各務久子、今岡利保の 3 名が引き継いで実施してきた。

調査区内は典型的な「里山」である。山、ため池、河川、水田、畑、果樹園、竹林、雑

木林と人が手を入れてきた土地利用の多様な風景がそのまま多様な動植物が生息・生育する自然環境を形成してきた。

近年の調査ルートの自然環境の変化は、幸いなことに都市化に伴う住宅地の造成、工場の進出等の人工的な開発事業はあまり見受けられないが、洪水・台風等の自然災害による環境の変化や太陽光発電施設の建設が調査地域内の山・耕作放棄地等で行われており良好な生息環境を減少させているのではないかと危惧される。また、都市部から近い里山という環境からか樹林帯にはゴミの不法投棄が見受けられる。

調査ルート上で観察された野鳥は 90 種

程確認されている。

ルート上の野鳥の生息環境を大きく 3 つのエリアに分けてみる事が出来る。

1 つ目は新郷瀬川を中心とした水田地区で、川沿いではアオサギ、コサギ、ゴイサギ等のサギ類、クイナ、バン等のクイナ類、カルガモ、マガモ、オシドリ等のカモ類、クサシギ等のシギ類が観察される。ただ、ここ最近、数年に渡る新郷瀬川の護岸拡張工事のため調査ルート上でのサギ類、カモ類、シギ類、カイツブリ、カワセミ、オオヨシキリ等が減少もしくは全く見受けられなくなった。また水田地帯にはスズメ、カワラヒワ、ムクドリ、ハシボソガラス、ケリ、ヒバリ、セッカ、カシラダカ、サギ類等が観察される。

2 つ目は合戦橋から味鹿までの集落と樹林帯先の今井集落である。ここにはスズメ、ヒヨドリ、ムクドリ、キジバト、キジ、モズ、カワラヒワ、セキレイ類、サギ類、カラ類等の身近な鳥と季節によりツバメ、

アオジ、ツグミ、シロハラ、ジョウビタキ等が観察される。

最後の 1 つは地理的にルート中央に位置する東京大学の愛知演習林の樹林帯と犬山市に特徴的な数箇所のため池で構成されているエリアである。東大演習林はルート上、最も重要な位置を占めており調査開始以来この変わらぬ自然環境が野鳥の観察種類・個体数の基礎となっている。このエリアで観察される鳥はおよそ 70 種あまりで、ノスリ、サシバ、オオタカ、トビ等の猛禽類から、アカゲラ、アオゲラ、コゲラ等のキツツキ類、メジロ、ウグイス、シジュウカラ、ヤマガラ等のカラ類、オオルリ、キビタキ等のヒタキ類、ツグミ、シロハラ等のツグミ類、コジュケイ、センダイムシクイ、ホオジロ、カシラダカ、カケス、ハシブトガラス等の主だった山の鳥を観察することが出来る。

ルート上に点在するため池でよく観察されるのがカワウ、アオサギ、カイツブリ、バン、カルガモ等で冬に飛来するカモ類はコ



場所：犬山市

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

キジ、カイツブリ、コサギ、ケリ、クサシギ、トビ、サシバ、コゲラ、モズ、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒバリ、ツバメ、ウグイス、メジロ、ツグミ、ジョウビタキ、カワラヒワ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ



6 岩屋堂 (いわやどう)

— 里山 —



1 調査地について

調査地「岩屋堂」は、瀬戸市の東部に位置し、愛知高原国定公園の一部であり、標高約 400m の岩巢山を中心に低山が連なり、そこを流れる鳥原川沿いに開け、いわゆる里山を形成している。開けたところでは、アカマツ、コナラ、ハンノキ、ヤシャブシ等の林が、その他のところではシイ、カシの林となっている。

春には桜、秋にはモミジと観光の名所としても知られ、名古屋からも近く、多くの観光客が訪れる。この岩屋堂には多くの野鳥が生息し、都市近郊ながら都市では見られない野鳥も多い。また、昆虫も多く、自然観察には絶好の場所である。

最近では、クマやカモシカを目撃情報もある。

近年、愛知県で自然をテーマとした万博が開催されるなど、里山と呼ばれる都市近郊の低山の重要性が再認識され、環境問題とともに雑誌、テレビ、新聞でも報道されるようになってきた。里山は、昔から炭焼きなどを行い、ヒトが手を加えてできた二次林、いわゆる雑木林であり、そこには昆虫や鳥類をはじめ多くの動植物の命が育まれてきた。また、人と自然との接点でもあり、人が自然を学ぶ、観察する、触れ合う場としても注目されるようになってきた。

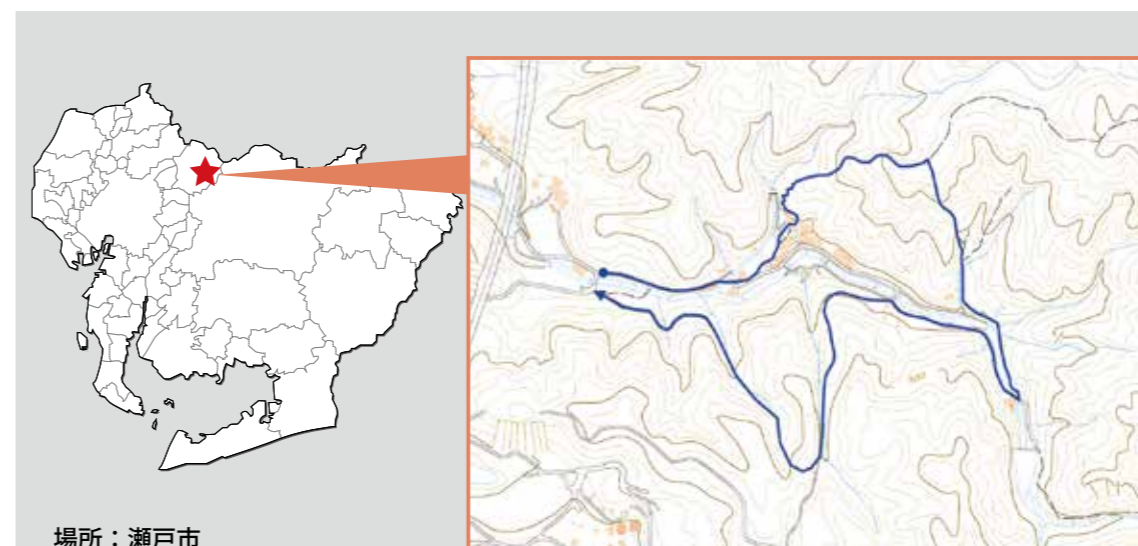
春には、ショウジョウバカマが咲き、桜の開花とともに岩屋堂の顔でもあるオオルリが南から渡ってくる。それからサンショウクイ、センダイムシクイ、ヤブサメ、キビタキといった夏鳥が渡ってくる。さらにシジュウカラ、ヤマガラなどのカラ類、ウグイス、ヒヨドリなどが囀り合いにぎやかになる。4月はそれら夏鳥の縄張り争いが見られ、間近に見られることもある。縄張りが決まり繁殖が始まると、姿があまり見られなくなり、囀りだけとなる。その頃になるとホトトギス、ツツドリの声が聞こえ、上空を見上げるとタカ類が飛ぶこともある。

繁殖が一段落する夏になると鳥の声も聞こえなくなり、観察数もぐっと減少する。

秋になり、渡りの時期になるとヒタキ類、タカ類が見られるようになる。しかし、近年エゾビタキなどのヒタキ類、タ

カ類がめっきり見られなくなった。秋も後半になるとジョウビタキ、ルリビタキ、ツグミ、シロハラなどの冬鳥が姿を見せ始める。ジョウビタキ、ルリビタキはあまり変動がないが、大型のツグミ類が姿を見せなくなってきた。ツグミが群れで飛んでいく光景は過去のものとなってしまった。最近ではライトアップをするなど紅葉見物に力を入れ、観光客が多く来るようになり、あまり姿を見せなくなってきていることも考えられる。

冬にはルリビタキの姿を観察できることが多く、岩屋堂の冬の顔になっている。アオジ、カシラダカもよく見られる。しかし、アオジも近年観察数が減ってきている。留鳥であるカラ類は群れで行動するようになり、春とは違ったにぎわいを見せている。そのなかでも、メジロはよく観察できるようになり観察数が増えている。



場所：瀬戸市

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

ホトトギス、トビ、コゲラ、アオゲラ、サンショウクイ、サンコウチョウ、カケス、ヤマガラ、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、ヤブサメ、エナガ、センダイムシクイ、メジロ、ミソサザイ、カワガラス、シロハラ、ルリビタキ、ジョウビタキ、キビタキ、オオルリ、キセキレイ、セグロセキレイ、イカル、カシラダカ、アオジ



7 鶺鴒の山 (うのやま)

— 水辺 —



1 調査地について

調査地「鶺鴒の山」は、知多半島南部の美浜町にある。名鉄上野間駅から南東へ約2km行ったやや小高い丘にある。昭和9年にカワウの集団繁殖地として国の天然記念物になったため開発をまぬがれ、そのままの姿で現在にいたっている。平成21年に農村自然環境整備事業で鶺鴒の池のまわりの観察路とトイレ付観察台が新しく作り直され、カワウや冬の多くの水鳥の観察には便利になった。

1970年代のはじめには日本各地にいたカワウがことごとくいなくなり、東京・上野の不忍池（しのばずのいけ）と鶺鴒

山の2か所になった。この鶺鴒の山にいたカワウは絶滅寸前になったが、地元の人々が鶺鴒の糞を肥料としてきた経緯があり、奇跡的に数を増やしていった。

秋になると遠くに行っていたカワウが鶺鴒の山に帰ってきて、にぎやかになる。朝、木々に止まっていたカワウが一斉に飛び立ち、みるみるうちに真っ黒な大きな集団になり名古屋港方面へえさを求めて飛び去る様子は圧巻である。夕方になると鶺鴒の山を目指して大きな「へ」の字をしたカギの集団（多いときは100羽以上）が次々に帰ってくるのもすばらしい

光景である。11月ごろになると冬鳥のマガモ、キンクロハジロ、ハシビロガモ等が飛来する。カンムリカイツブリ、ミコアイサが来ることもありにぎやかになる。

2 鶺鴒の山における特徴的な変化 カワウ

カワウは以前よりもやや減ってはいるものの、2016年現在においても2000羽以上が観察されている。しかし、50年前の調査開始から10年ほどは、500～900羽程度と1000羽に満たない数であった。

しかしながら、この時期は日本全体でもカワウが3000羽程度しかいなかった時期であり1000羽に満たない数とはい

え、日本全体のカワウの2～3割が鶺鴒の山に生息していたことになる。そして1980年代から急激に増加をはじめ、1995年の7000羽を超えたところをピークとしてそこから緩やかに減少をはじめ2016年現在では2000～3000羽となっている。鶺鴒の山では減少しているものの愛知県内や日本全体ではカワウは増加傾向にあり、鶺鴒の山のカワウの生息数が減る一方で、別の場所で新しい営巣地ができたり、他の営巣地の生息数が増加していることがうかがえる。

鶺鴒の山におけるカワウの減少の原因は元々1000羽程度の数だったものが1980年からの急な増加により5000羽を超えている期間は20年にもなっており、長期間の大量営巣により環境が悪化し、群れの一部が新しい営巣地を求めて移動し



場所：知多郡美浜町

観察された主な野鳥

マガモ、ハシビロガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、カワウ、ゴイサギ、アマサギ、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、ツバメ、ウグイス、セッカ、シロハラ、ツグミ、ホオジロ、コジュケイ

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

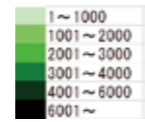


た結果なのかもしれない。

カワウが増えると集団繁殖地としては困った問題がおきる。それはカワウの糞によりカワウの止まり木や営巣用の木が枯れてなくなってしまうことである。2016年からカワウは鶺鴒の山で繁殖しにくくなったのか、近くの管田池（鶺鴒の池から約1km）や中山池（鶺鴒の池から約2km）に移っているようだ。長い間この移動を繰り返し必ず鶺鴒の山に帰ってくる。

カワウや増加を続けるアオサギとは対照的にヒヨドリはほとんど数に変化が見られない。

カワウ



アオサギ

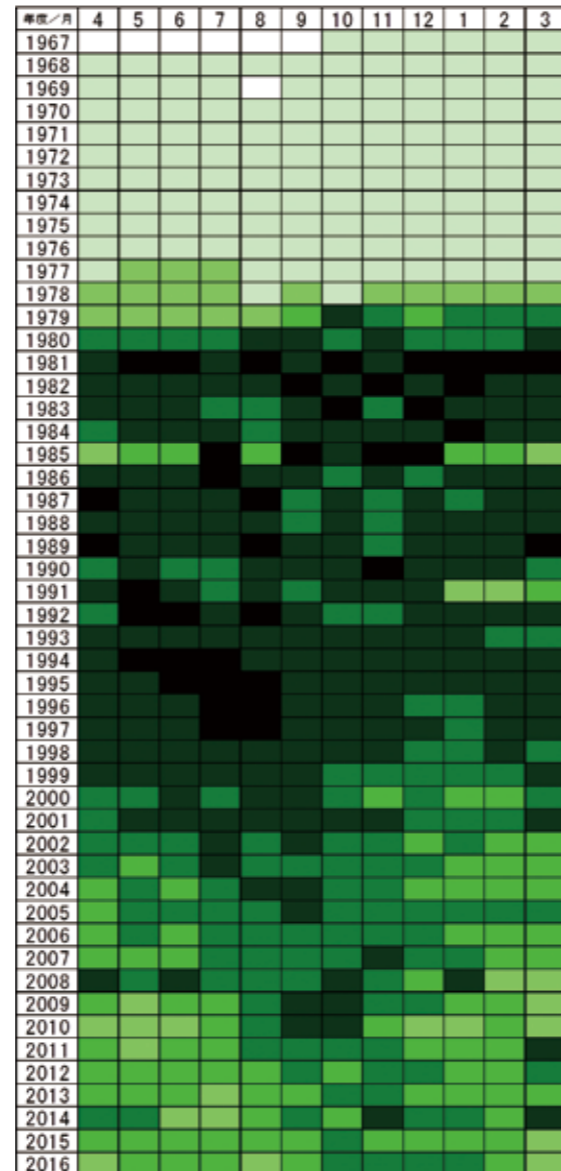
アオサギは、カワウが群れで魚を追い立てている所に待ち構えて集まった魚を採ったり、カワウが飛行中に吐き出した魚を拾うなど、カワウを採食に利用しているところがある。

そのため、カワウの営巣地の近くにアオサギがコロニーをつくることも多く、鶺鴒の山におけるアオサギも1980年のカワウ増加が開始されたあたりから観察されるようになり、そこから増加を続け2016年現在では最大40羽程度観察できるまで増えている。

カワウは2000年あたりから緩やかに数を減らしているが、アオサギは夏から秋にかけては別の場所に移動したのか観察数が少なくなるだけで、鶺鴒の山における生息数自体は減ってはいないようである。

ヒヨドリ

ヒヨドリは50年間を通して、一時的に100羽以上観察される月がある以外はだいたい10~30羽程度の数が観察されている。50年間の間に数に増減のある

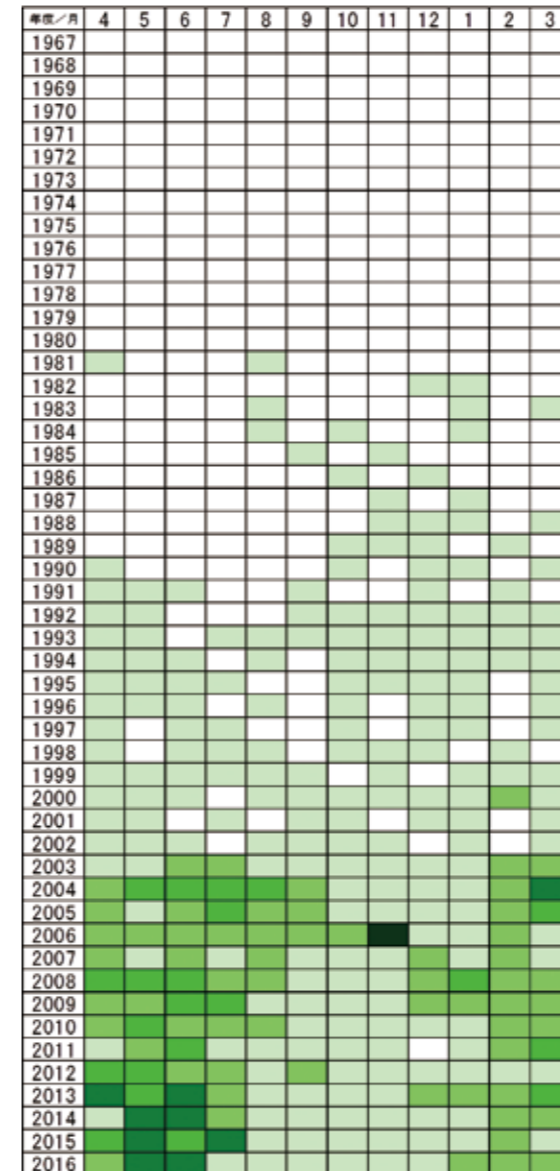
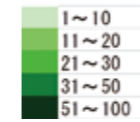


カワウの増加による糞害などで他の野鳥の生息環境が悪化しているのではないかとと思われるのだが、ヒヨドリについて

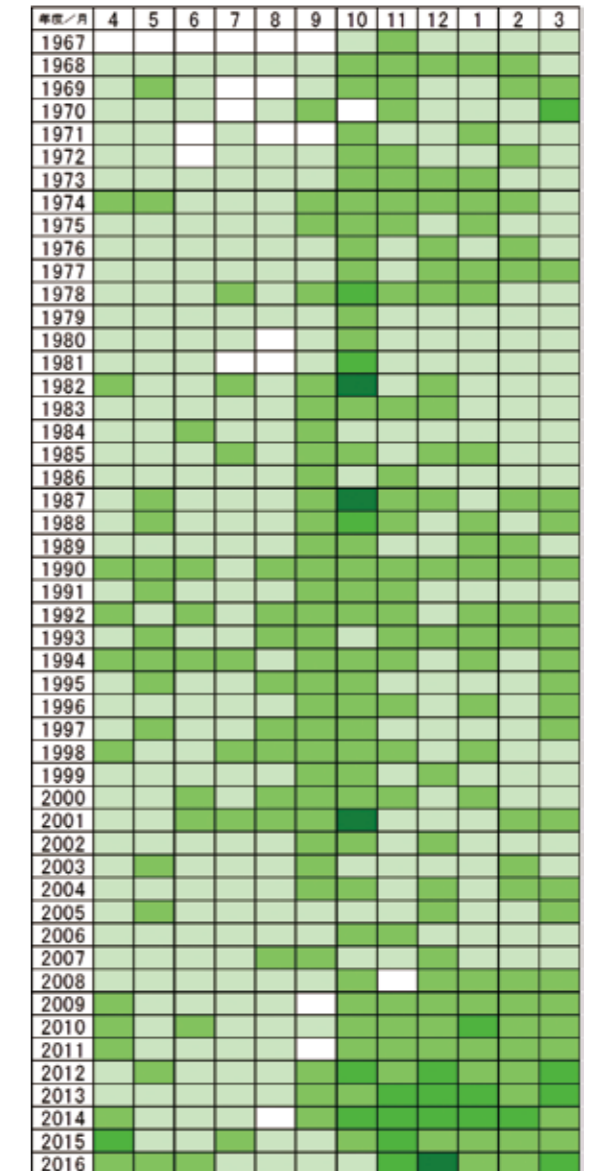
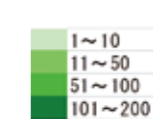
言えばそうした環境悪化の影響を受けているとは思われない。

(岩井昇)

アオサギ



ヒヨドリ





8 鍋田 (なべた)

— 水辺・耕地 —



1 調査地について

調査開始の1970年当時、鍋田調査地はシギやチドリなどの水鳥が生息する、国内でも代表的な水辺環境であった。近年は開発と乾燥化が進み、生息する水鳥は激減した。調査地の環境区分も、現在は水辺でなく乾燥した耕地の環境に変遷している。

主に、伊勢湾岸自動車道などの開発により、草地のかなりの面積を失い、湾岸道路工事で牛小屋・羊小屋や養豚のし尿処理・牛糞処理場も消滅し、渡り鳥が餌を探す場所も減りつつある。定期的に見られていたツバメチドリの群れも2～3

年に一羽出るかどうかである。冬場の午後3時ぐらいになると今のゴルフ場が葦原だった方向からかなりの確率でハイイロチュウヒやコミミズクが現れて、並んで待っているカメラマンの車列がこれらを追いかけ回す姿を思い出す。

隣接する弥富野鳥園と木曾岬干拓地は鳥たちにとってかなり大切なねぐらや繁殖場所として利用されており、特に木曾岬干拓地は400haの面積があり広大な葦原を有し、チュウヒの繁殖地として知られていた。

伊勢湾岸自動車道が1985年に一部開通し、2005年に全面開通したことにより、干拓地が南北に分断され、さらに路線に沿うように倉庫が連なる建築工事が続き、鳥の移動に影響が出ていると思われる。高速道路を通すために牛小屋や羊がのんびりしていた広場もなくなった。養豚場からの糞尿を干拓地にある広場へ散布する時などはなんとも言えない香りが充満していたが、そのお陰で鳥たちの餌は十分確保されていた。

鍋田埠頭は、元は広々とした葦原であったが、開発工事が行われた影響で、水路にかなりの土砂が流れ込み、葦原から水路を渡り、干拓地に入るハイイロチュウヒの姿が一時的に見えなくなったことがあった。しかし、ここ数年はまた姿がみられるようになりカメラマンの姿も少し増えてきている。

気になるのは2014年あたりからキジの姿を見なくなって来ていることであり、3月から7月の繁殖期にはそこかしこでホロ打ちする姿が見られたものであったが、2、3回見に行っても姿を見られないこともあり、その原因が何なのであるかは思いつかない。干拓地内の草地がなくなりつつあり、冬季に水が入っていない田からは、砂ぼこりも立つこともあったが、現在は幾つか水を張った田も出来はじめ、稲作自体も今までの田植え時期をずらし植える所も出始めた。シギ・チドリの飛来する時期に、休息と採餌する場所もあり、最近の薬剤散布も変わってきたのか、サギ類も徐々ではあるが種類数ともに増え始めている。最近の農家では後継ぎ問題もあるのか、専門的に畑仕事を行う会社が主に、田植えから稲刈りまで行っている。



場所：弥富市

観察された主な野鳥

カワウ、アオサギ、ダイサギ、タゲリ、ケリ、コチドリ、イソシギ、チュウヒ、ヒバリ、ツバメ、セッカ、タヒバリ

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より



9 矢作川河口（やはぎがわかこう） - 水辺 -



1 調査地について

「矢作川河口」の調査は、車で堤防上を移動しながら確認できた野鳥と、途中の20か所程度で車を降り、望遠鏡を使用して河川内で確認できた野鳥を記録している。

調査コースは碧南市の川口町と2号地との境目を始点として、棚尾橋の上流まで、西尾市に移動して中畑橋から14号地の河口部を終点として調査している。途中、碧南側の2箇所では河川敷に降り、1箇所では高水敷を車で移動しながら草地とヨシ原を、他の1箇所では徒歩でワンドとヨシ原および河岸の林を調査している。調査が開始された1972年には河口沖

の両岸に埋立地はなく、干潟は河川内から河口の北側沖まで広がっていた。矢作川には中州や広い砂地が広がっていたが、現在の調査範囲は上流部分およそ2/3の両岸には高水敷が設置されている。

上流部は小潮の満潮時でも干満の影響が及ぶが、下流の1/5は大潮の干潮時でも干潟の出ない水面で、砂地が残るのは右岸の一部に限られる。

調査の範囲外であるが、調査開始当時の碧南2号地は北の方から埋立てが進められており、埋立て途中の湿地ではシギ・チドリをはじめとする水鳥が採餌や満潮

時の休憩場所として利用していた。

コアジサシやチドリ類が繁殖し、ツバメチドリも繁殖していた。ヨシ原や草地ではチュウヒやオオヨシキリなども繁殖していて、現在、県内では観察も稀になっているヨシゴイも普通に繁殖していた。

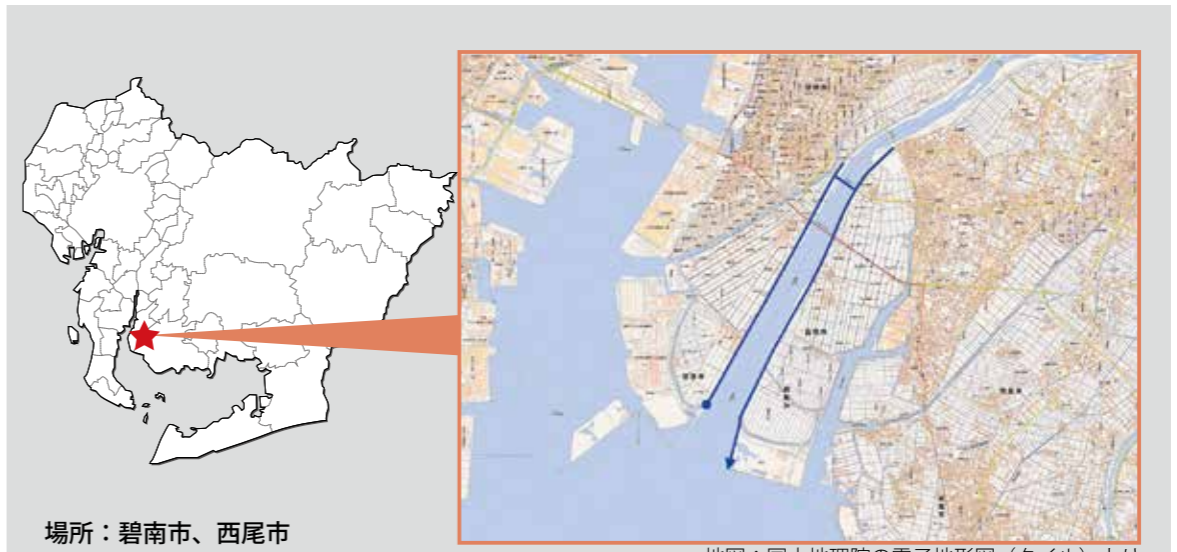
1980年から埋立てが始まった西尾市側の14号地も、一時は同様の環境になったが、埋立て技術の進展によりその期間は2号地とは比較にならない程、短いものであった。14号地の造成と2号地南端の堤防建設によって、矢作川の河口部は沖方向へ1km以上移動している。

矢作川河口に飛来する野鳥で、比較的生息数が安定しているのはカモメの仲間、主に10月～4月と12月～4月頃に飛来して越冬するユリカモメとカモメ、5月～11月に繁殖はしないが飛来して生息するウミネコなどは、減少傾向がみられるものの、現在でも毎年数百羽以上

の群れが飛来している。これらのカモメ類は、主に海上で生活しており、干潮時に現れる上流部の砂州へ飛来して、河川の真水で水浴びをすることが目的である。

カモ類では、冬期にスズガモの数が1980年代の後半から万単位に増加しているが、これは河口部の横で14号地の埋立てや2号地南端の堤防建設が行われた時期に一致しており、その中にできた広い水面を休息地として利用するようになったことによる。2015年には2号地の水面が埋め尽くされ、今後は減少することが予想される。

他のカモ類も近年生息数の増加が認められるが、最大の要因は狩猟規制によるものである。矢作川大橋より下流と碧南市の干拓地や2号地、および西尾市の14号地が銃猟禁止となり、狩猟期に入っても銃声に追われなくなったことで、冬期の生息数は増加している。



場所：碧南市、西尾市

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

- 周年：カワウ、アオサギ、ダイサギ、イソシギ、チョウゲンボウ
- 夏：ウミネコ、オオヨシキリ
- 冬：ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、コガモ、キンクロハジロ、スズガモ、カムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、オオバン、ユリカモメ、カモメ、タヒバリ、オオジュリン
- 春秋：チュウシャクシギ、キアシシギ、ソリハシシギ、ヒヨドリ



10 木曾川葛木 (きそがわかつらぎ) - 水辺 -



1 調査地について

「木曾川葛木」は、愛知県の西にある木曾川河川敷が調査地である。

愛西市三和町から葛木町の木曾川左岸堤防で、河口より 16km から 20km の調査区域である。

葛木の堤防上に立つと、川の向こうに多度山が正面に見え、下流はるかに山の稜線が低く連なっている。対岸の松林の向こうは長良川である。カヌー競技場が整備されている。

堤防の東側には屋敷林に囲まれた集落と、ハス田、水田が広がっている。木曾川左岸の高水敷は、水際のカワヤナギ等低木を残し盛り土整備され、船の係留施

設が整備されている。工事の埋め立て中池になっていた所にカワセミが姿を見せたが、その後埋め立てられ今はセイタカアワダチソウが繁茂している。ヨシの群落は調査区域にはなく、所々にヨシ原が残るが、セイタカアワダチソウに追いやられている。

例年、少ないヨシ原にオオヨシキリが渡ってきて、大きな声の囀りを聞かせてくれる。

左岸堤防上の草地では、ヒバリ、ムクドリ、ツグミなどが見られる。際の樹木ではオオタカ、ミサゴが枝に止まっているのを見るが、いつも背中をみせている。

堤防東側の畑地では、キジやサギが見られるが、シギ類などの渡り鳥は餌場となるハス田が少ないのか、飛来時期が合わないのか、なかなか見ることができなくなっている。

また、川中にできる中州も以前は現れてチドリ類が来ていたが、最近では観察日には中州が見えなくなっている。

春から夏場にかけて、調査地では鳥の種類も数も少なくなっている。観察される主な鳥はカワウ、カルガモ、オオヨシキリ、ツバメ、サギ類、カラスぐらいで、以前は対岸よりカッコウの声が聞かれた。

当調査地では、ラジコン飛行機を操縦する人やモーターグライダーを楽しむ人たちが、それぞれ飛行場を整備し、人が集まっている。また、船着き場も整備されているので、家族で来て水上バイクを走らせるなど、一年を通じ、天気の良い日は河川敷の利用者も多くなってきてい

て、手前の岸近くにはカルガモ、キンクロハジロ以外は寄りつかない。冬期のカモ類の多くは、対岸の岸から伸びている水制護岸の周りの流れのない奥まった所や護岸近くに集まって来ている。

カワウ、カルガモは、護岸に上がり休んでおり、コガモ、キンクロハジロなども集まり羽を休ませている。数は少ないが、ときどきトモエガモ、ミコアイサを見ることができ、最近ではオオバンが多く見られるようになった。

やや流れのある所では、カンムリカイツブリが数羽ずつ点在し、潜水から浮き上がるのを見る。マガモの群れにオナガガモやホシハジロ、ヒドリガモ等が混ざり合っている。

幾重にも重なり合っている群れが下流へ流れてゆくのを見ていると、船などに驚いたカモの群れが一斉に飛立ち移動する情景には迫力があり、見とれてしまう。

場所：愛西市

観察された主な野鳥
 キジ、コハクチョウ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、カンムリカイツブリ、カワウ、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、オオバン、ミサゴ、オオタカ、ノスリ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ヒヨドリ、ムクドリ、ツグミ、ホオジロ

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より



11 木曾川玉ノ井(きそがわたまのい) - 水辺 -



1 調査地について

調査地「木曾川玉ノ井」は、木曾川河口から約40km上流の木曾川橋下流左岸河川敷の緑地帯で、二次林、低木草本類、草原で構成されており、中洲と水域が含まれている。

1972年から調査されているが、近年、公園が整備されて環境は変化している。

樹林帯ではコゲラ、シジュウカラ、エナガ、ヒヨドリ、カワラヒワ、ホオジロ、ヒバリなどが繁殖し、冬期はツグミ、シロハラ、ジョウビタキ、アオジ、カシラダカ、シメ、ノスリなどが越冬している。

渡りの時期には、ヒタキ類、ムシクイ類など多くの種が利用していると思われ

るが、滞在期間が短いため、多くの種が確認できていない。

水辺では、ケリやサギ類が一年を通して生息し、夏季には調査地周辺で繁殖しているササゴイなども採餌場として利用している。冬季はマガモなどのカモ類が見られ猛禽類も出現する。

過去に観察されたシギ・チドリ類は激減している。

公園や駐車場などが整備され、訪れる人が増えゴミも増えた。

本調査地の区分は水辺であるが、水域全体を見通せず、河川敷を利用する種の確認が主になってしまっている。

調査マニュアルでは、『幅500mの区域内に見聞する鳥類すべてを観察する』となっているが、大型種と小型種では確認率が異なることや、入り江状に入り組んだ場所など視野の優劣により観察確認に差が生じてしまうため、観察結果の扱いは、水域と陸域などを、停線などを利用して区分して表示する必要があると思われる。

渡りの時期に、サシバなどが上空を通過するのが観察される時もあるが、調査地に降り立ち、その場を利用しているのではないため、確認種をそのまま調査地の生息種と同一には扱えない。

カワウは、調査地内で確認される場合と、上空を通過する個体があり、区別して評価する必要がある。

確認した種がどのように調査地を利用しているのか、その行動に重点をおいて

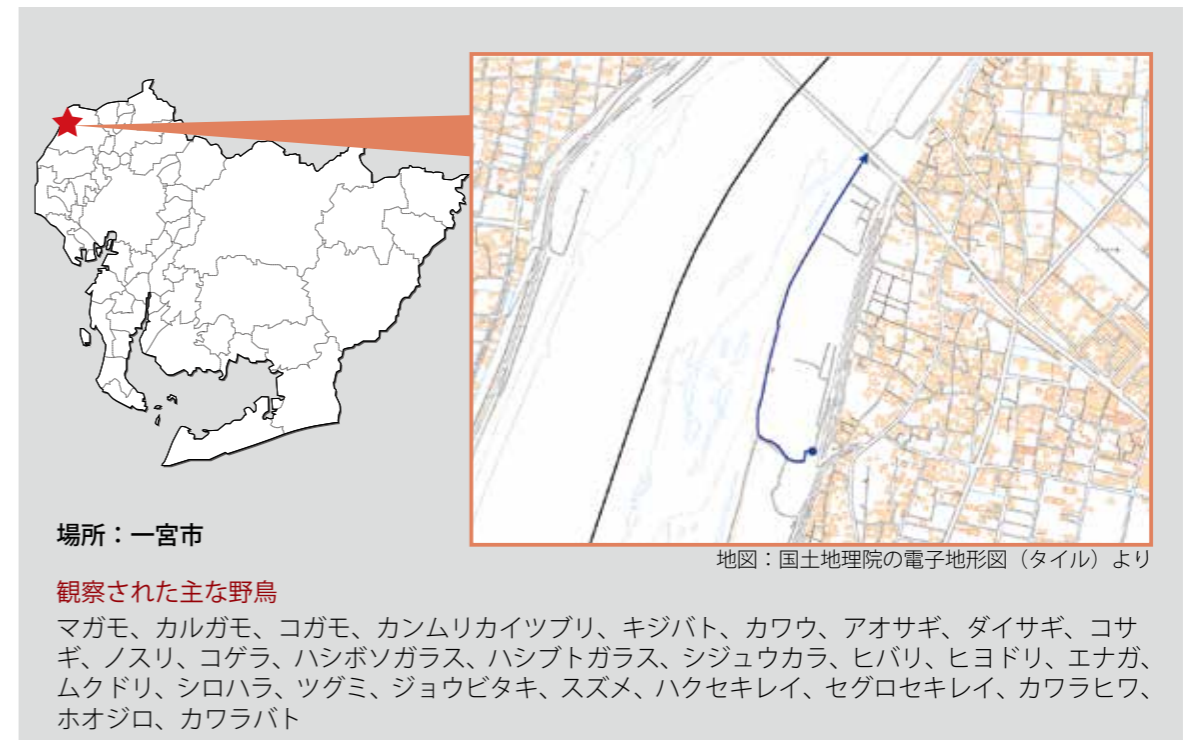
調査しなければ、調査地の生息状況を把握することは難しい。

この調査地の開放水面を利用する種の代表はカモ類であるが、気象条件などにより、一時的に数が増えることはあるが相対的に減ってきている。

オオタカなどの猛禽類が狩りを行なった場合などは、調査地から移動することもあり、定量的に把握するには同時に広範囲を調査することが必要である。

なお、調査時間以外に、高空の遠方を飛翔していたオジロワシ属(Savigny)も確認されたが、調査範囲外であることと、種の同定が出来なかったため、観察記録に記載していない。

コハクチョウも滞在する場合もあると思われるが、調査日には観察されなかった。



場所：一宮市

地図：国土地理院の電子地形図(タイル)より

観察された主な野鳥

マガモ、カルガモ、コガモ、カンムリカイツブリ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、ノスリ、コゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、エナガ、ムクドリ、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、カワラバト

